



目次

「医師国家試験結果と合格率向上の対策、日々の教育に関する雑感」…………… 2
 平成29年度卒業生の看護師等国家試験結果と合格者の進路状況…………… 3
 医学教育分野別認証評価の受審に向けての取り組み…………… 4
 異動のご挨拶…………… 5
 退職の挨拶…………… 6

トピックス

第30回日本医学会総会2019中部のイベントとして、「市民公開健康講座」を開催 …… 7
 専門医制度について…………… 8
 第70回西日本医科学生総合体育を終えて…………… 11
 第70回西日本医学生総合体育大会 総合優勝…………… 15
 研究室研修学生委員活動記録…………… 16
 三重大学医学部附属病院 リウマチ・膠原病センター 開設1周年記念
 市民公開講座『リウマチ 膠原病って、どんな病気?』を主催して…………… 21
 医学科オープンキャンパス開催報告…………… 22
 看護学科オープンキャンパス…………… 25
 看護学科学学生3名が平成30年度学業優秀学生学長賞を授与…………… 26
 看護学科4年生7名に医学部長賞が授与されました…………… 26
 『三重パープルリボンの活動紹介』…………… 27

学会だより

2018年 日本ショック学会・会長賞受賞（三重大学2年連続受賞）…………… 31
 第7回臨床高血圧フォーラム 開催報告…………… 32
 「第3回小児がん診療体制における東海北陸ブロック多職種連携研修会
 in 金沢（石川県・富山県・福井県）」…………… 34
 第25回日本遺伝子診療学会大会を開催して…………… 36
 日本衛生学会学会賞2018を受賞して…………… 37
 Congenital Anomalies Awardを受賞して …… 38
 European Society of Cardiology (ESC) Congress 2018: Best Posterを受賞して …… 38
 第39回日本心血管インターベンション治療学会東海北陸地方会
 Young Investigator Awardを受賞して…………… 39
 第90回日本超音波医学会 奨励賞を受賞して…………… 40
 第24回日本胎児心臓病学会 里見賞「研究部門」を受賞して…………… 41
 第70回日本産科婦人科学会 JSOG Congress Encouragement Awardを受賞して…………… 41
 日本先天異常学会奨励賞を受賞して…………… 42
 第27回日本臨床環境医学会学術集会を開催して…………… 43
 5th International Moyamoya Meeting Best poster awardを受賞して…………… 44
 第13回日本小児耳鼻咽喉科学会 会長賞を受賞して…………… 45
 第113回アメリカ泌尿器科学会 ベストポスター賞を受賞して …… 46
 前立腺生物學シンポジウム伊勢志摩2018…………… 47
 第一回 日本肝胆膵外科学会 東海地区地域教育セミナーを開催して…………… 48
 「日本臨床腫瘍薬学会学術大会2018初心者優秀ポスター演題賞を受賞して」…………… 49
 第12回国際川崎病会議でRichard D. Rowe Memorial Lecture賞を受賞して …… 50
 第6回国際肺高血圧会議で優秀演題賞を受賞して…………… 51
 三重県薬剤師学術フォーラム2018の優秀演題賞を受賞して…………… 52

学位記授与…………… 53
 編集後記…………… 54

「医師国家試験結果と合格率向上の対策、日々の教育に関する雑感」

教務委員長（分子病態学） 島 岡 要

第112回医師国家試験の本学の合格率は総数で95.6%（全国平均90.1%）で、全国12位（国公立では5位）と概ね良好でした。今後のさらなる合格率向上のために、医学看護学教育センターと協力しIR機能を最大限活かして、早期に教育サポートの必要な学生を見つけ出し、積極的なメンタリングを行うことが有効なアプローチであると考えます。

またそれと同時に、医師国家試験合格という重要であるがある意味近視的な教育目標に過剰にとられることのない、医学研究や地域医療のリーダーやイノベーターとなりうる人材を育成する長期的な視点に立った教育も忘れてはならないと考えます。そのためには授業や実習をご担当いただく、各先生方の熱意と創意工夫を十分活かせるような教育環境の整備と構築に努めます。医学教育の質保証の観点から、教育内容の基準化には務めねばなりません。現在ある本学医学部の教育の長所、とくにコミュニティーから注目されている特記すべき教育の取り組み（いわゆる名物先生など）は、積極的にサポートすることが長期的には良い結果を生み出すと信じています。また学生の内発性や創造性を促進するための、自主的学習習慣をサポートするような環境整備（自習スペースやロッカーの確保）にも努めます。

また最近では、学生の意見に直接耳を傾けるために、各学年ごとに有志学生を複数集めて、現在の医学教育に関する意見を交換する“タウンミーティング”的な情報収集活動を行っています。概ね学生は本学の教育の現状に満足しているようですが、

いくつかの重要な課題も見えてきました。詳細な内容につきましては十分に教務委員会等で検討したのち、然るべき対策を講じる予定ですが、ここでは予備的に複数の学年の学生から多く寄せられる要望をご紹介しますので、必要に応じて先生方の授業計画に反映させていただければ幸いです。

1つ目の要望がレジメです。学生は授業でレジメが配られることを強く期待しています。レジメがあればより良く授業内容を理解し、効果的に復習できます。先日産業医大の医学教育の専門家による講演会に参加しましたが、「今の時代は大学教員がレジメを準備することが標準である」と教えられました。三重大はペーパーレス化（特にカラーコピーの抑制）を進めていることを考えれば、ムードル等を使ってのレジメファイルの提供が現実的な対応であるかもしれません。

2つ目が授業への積極的な参加の切望です。先生方の印象に反するかもしれませんが、学生は何らかの体験やコミュニケーションを切望しています。授業中に手を上げて積極的に発言する高ストレス状況は避けたいと思いながら、漫然と1時間ひたすら先生の話すことを聞いているだけの受動的な状況には満足していません。少し複雑ですがこのように感じているのです。グループディスカッションやワークショップ形式を利用した楽しみながらも学習できるインタラクティブな環境を、志の高い優秀な学生ほど望んでいるようです。現在進行中のアクティブラーニングの取り組みを、教師側に過度な負担をかけることなく促進する方策を考えていく予定です。

平成29年度卒業生の看護師等国家試験結果と合格者の進路状況

看護学科学生委員長 成 田 有 吾

平成30年3月卒業の本学看護学科第17期生の看護師等国家試験結果（第107回看護師、第104回保健師、第101回助産師）と進路状況についてご報告いたします。

国家試験の結果を下記（表）にお示しします。平成29年度の看護師等国家試験では当学科卒業生は、新卒者77名中77名が看護師に合格しました。また、保健師資格を受験した20名中20名、助産師資格を受験した5名中5名が合格しました。つまり、すべて100%の合格でした。また、昨年、看護師で2名の、また助産師で2名の不合格者がありました。今回、それぞれ合格しています。

今回の合格率は、看護師は昨年とほぼ同様からやや高い程度、保健師は昨年より9%低く、助産師は5%ほど高くなっています。保健師の受験資格は、選択制となりました。今回20名の学生が看護師および保健師、5名の学生が看護師および助産師、それぞれ二つの国家試験を受験しました。複数の国家資格を受験する準備は容易ではありませんが、全員目標を達成しております。

卒業生80名の進路は、就職79名（看護師72名、保健師2名、助産師5名）、進学1名（養護教諭別科）でした。就職先は、県内54名、県外25名、このうち三重大学医学部附属病院は42名（看護師39名、助産師3名）でした。今年度も県内への就

職先が多い状況です。

学科教員一同、次年度以降にも高い合格率をめざし、気持ちを新たに取り組んでおります。本年も5月8日に第4学年の学生を対象に進路説明会を開催しました。この機会に、学生には、国家試験、進学、就職に関する情報を提供し、個々の進路についてよく考え、国家試験のための学習に力を入れるよう指導しています。看護学科ではゼミナール指導教員が学生とのコンタクトを高め、学習、進路、その他の相談に適宜応じる懇切な指導体制をとっています。また、国家試験に向けて模擬試験が活用され、高い効用も認められることより、引き続き模擬試験複数回が今年度も予定されています。看護学科育成会からは、国家試験対策への援助（模擬試験等）や、学習に必要な事物等の購入についてもご支援いただき、学生の自己学習に非常に役立っています。

現在、看護師や助産師の社会的需要は非常に高く、卒業生が就職に困ることは今のところありません。各地の医療機関は、質の良い看護職の確保に大変な努力を続けています。三重大学附属病院では、病院長、看護部長をはじめ多くの方々が進路説明会や育成会総会など、機会あるごとに看護学科へ足を運んでくださり、本学附属病院の活況や支援体制など、熱意を込めて語っていただきま

医学部看護学科17期生 国家試験合格状況
（第107回看護師、第104回保健師、第101回助産師）

	看護師			保健師			助産師		
	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率
全 国	64,488	58,682	91.0%	8,191	6,666	81.4%	2,230	2,201	98.7%
うち新卒者	57,929	55,764	96.3%	7,675	6,572	85.6%	2,087	2,071	99.4%
全国大学(新卒)	19,824	19,475	98.2%	6,868	5,965	86.9%	547	544	99.5%
本 学(新卒)	77	77	100.0%	20	20	100.0%	5	5	100.0%

した。学生委員会としても学生に適切な進路が開けるよう活動して行きたいと考えております。引き続き、医学部ならびに附属病院各位、ゼミナー

ル指導教員各位のご支援とご指導をよろしくお願いいたします。

医学教育分野別認証評価の受審に向けての取り組み

医学教育分野別認証評価ワーキンググループ 堀 浩 樹

ご存知の方も多いと思いますが、米国・カナダ以外の医学部を卒業した医師が、米国での臨床研修を行うためには、米国医師国家試験に合格し、Educational Commission For Foreign Medical Graduates (ECFMG) による資格認定を受けなければなりません。2010年9月、ECFMGが、世界医学教育連盟 (WFME) が示す医学教育の基準に代表される国際的に認められた基準を満たさない医学部からの卒業生にはECFMG申請を認めないとの方針を提示しました。

日本の医学部は、米国で臨床研修を行う医師を育成することを目的としている訳ではありませんが、日本の医学部卒業生が医師として海外で活躍する機会が狭められるということは、日本の医学部卒業生の医師としての能力が国際的に認められない、あるいは日本の医学部での教育には国際通用性がないという国際的な評価を受けることになります。日本医学教育学会、文部科学省、全国医学部長病院長会議では、この外圧を受けて、状況の改善に向けての動きを開始しました。

2012年度に文部科学省大学改革推進事業により医学教育分野別認証トライアルが関東を中心とする一部の大学で開始され、2015年には一般社団法人日本医学教育評価機構 (JACME) が設立されました。JACMEでは、WFMEの評価基準の日本語版を作成し、この基準に依拠する審査を開始しました。

JACMEによる認証評価を受審し認定を受け

ても、審査を実施するJACME自体がWFMEからの認定を受けた公式な審査機関でなければ、JACMEによる認証を受けた大学がWFMEの基準を満たしていることにはなりません。JACMEでは、国内大学の審査状況についてWFMEによる認証査察を受け、2017年3月にWFMEからの認定機関としての10年間の認証を受けました。それにより、2017年4月以降にJACME認証評価を受審し、認証を受けた大学からWFME認証大学として認められることになりました。

以上のような状況のなか、本学は2020年1月にJACMEによる医学教育分野別認証評価を受審することになっています。審査される領域は、①使命と学修成果、②教育プログラム、③学生の評価、④学生、⑤教員、⑥教育資源、⑦プログラム評価、⑧統轄および管理運営、⑨継続的改良の9領域で、約200の評価項目にわたって取り組み状況、現状分析／自己評価、現状への対応、改善に向けた計画を記載することが求められます。また、それぞれの記載内容を証明する証拠資料の提示を求められます。現在、この膨大な作業を医学部長、教務委員長のリーダーシップの下、多くの教員の協力を得て進めているところです。

JACME、ひいてはWFMEからの認証を受けることを目標にして準備をしていますが、その準備の過程で、自学の医学教育上の課題を把握し、課題解決に向けての一步を踏み出すことにこそ、認証評価受審の意義があると言えます。そして、医

学部構成員である教職員・学生が、世界標準の医学教育を理解し、医学教育の継続的な改善を行うことが医学部の社会に対する責任であると考えます。

2018年9月現在、21大学が既にJACME認証を受けていますが、本学も晴れて認証大学になれるよう関係者で力を合わせて行きたいと思います。

異 動 の ご 挨拶

環境分子医学分野 平 工 雄 介



このたび、大学院生時代も含めて22年間お世話になった三重大学を退職し、2018年10月1日より福井大学医学部環境保健学分野の教授として着任することになりました。

京都大学大学院の院生であった頃は、川西正祐先生（現 三重大学名誉教授、鈴鹿医療科学大学副学長・薬学部教授）のご指導のもと、ベンゼンなどの一般環境や産業現場に存在する発がん性化学物質による酸化DNA損傷（活性酸素の生成によるDNA損傷）に関する研究を行っていました。大学院の2年目に川西先生が三重大学医学部の衛生学教室（現 環境分子医学分野）の教授として着任することになり、私は三重大学に指導を委託する形で研究を続けました。京都大学で学位を取得後、2000年に三重大学衛生学教室の助手として採用されました。三重大学在職中は、タイ・コンケン大学や中国・広西医科大学などの海外の研究機関や三重大学などの臨床講座との共同研究を行う機会に恵まれました。共同研究先から生検・手術標本を提供していただき、感染症や慢性炎症による発がんの過程でDNA損傷塩基8-ニトログアニンの生成が関わることやその分子機構を多数国際誌で報告することが出来ました。この研究では、8-ニトログアニンに対するポリクローナル抗体の作成法や免疫組織染色法について、解剖学

教室の馬 寧先生（現 鈴鹿医療科学大学看護学部教授）のご指導を受けました。最近ではこれらの成果を発展させ、アスベストやナノ素材などの繊維・粒子状物質による発がんや呼吸器疾患の分子機構とリスク評価に関する研究を進めています。現在は、村田真理子先生が環境分子医学分野の教授職を引き継いでおられますが、このような研究を自由にさせてくださったことに感謝しております。

異動先の福井大学医学部の環境保健学分野とは、衛生学・公衆衛生学に相当する研究教育分野です。環境保健学とは、疫学研究や実験研究の成果を、個人の疾病のリスク評価、環境中の有害因子の低減、国や自治体の政策立案など、ヒト・環境・社会の全てのレベルで応用することにより、疾病予防と健康増進に貢献する学問と考えています。環境保健学分野はこのような活動を行う福井県内唯一の医学部の教室であり、行政や医療機関などとも連携しながら、社会医学の研究・教育および地域保健や産業保健などの実践活動に貢献する人材の育成に努めたいと思います。また環境保健学分野は、福井大学医学部で衛生学と公衆衛生学を担当する唯一の教室のため、学生教育で担当する範囲は三重大学在籍時に比して極めて広く、また講義に加えて保健所や老人福祉施設などの公衆衛生に関連する施設を対象とした実習も担当します。着任早々、講義と実習の予定が立て込んでおり、現在その準備に追われているところです。

最後に、これまでお世話になりました先生方にこの場を借りて深く感謝申し上げますとともに、三

重大学医学部の今後の益々のご発展を祈念しております。今後とも宜しくお願い申し上げます。

退 職 の 挨拶

臨床研究開発センター 西川 政勝

約41年の長期にわたり三重大学医学部及び附属病院でお世話になり皆様に大変感謝しております。今までの私の経歴を述べさせていただきます。1977年4月に三重大学医学部第2内科（山田外春教授）へ入局、大学院へ入学、1979年4月から医学部薬理学教室（日高弘義教授）で血小板の基礎研究や臨床薬理学的研究に従事、1981年3月 三重大学大学院医学研究科（博士課程）修了。1981年4月 三重大学医学部薬理学講座助手、1981年9月～1984年4月 米国立予防衛生研究所（NIH），NHLBI，Lab. of Molecular Cardiology（R.S. Adelstein博士）に留学し、2年7ヶ月の短い間でありましたが、生化学的及び薬理学的研究に没頭しました。1984年4月に帰国、三重大学医学部附属病院第二内科（白川茂教授）助手、1990年4月 三重大学医学部内科学Ⅱ（血液腫瘍内科）（珠玖洋教授）講座 講師となり、この間は血液学の診療と研究・教育に従事しました。

2001年4月 当時の病院長 葛原先生のご指名で治験管理センター副センター長を兼務しました。当時のセンターは、私と薬剤師CRC 1名、事務1名の3名が20㎡の小部屋でした。各地の治験先進地域－徳島大学病院（曾根先生）、大阪医療センター（楠岡先生）、東京大学病院（荒川先生）等を訪問、またシンポジウム等に参加、情報収集を行い三重大学病院における治験の推進や治験の支援のあり方の参考にさせていただきました。2003年11月には、三重大学病院、三重県、三重県医師会が連携・協力して三重県の地域圏で治

験を推進するため、NPO法人「みえ治験医療ネット」設立、初代理事長坂倉康夫先生（現在は竹田寛先生）、私は常務理事を設立以来務めております。2004年～2005年厚労省は「治験活性化3ヶ年計画」で大規模治験ネットワーク構築事業を開始したので応募し、全国22のネットワークが選定されNPO「法人みえ治験医療ネット」はその1つに選ばれました。NPO法人は、約16年を経過していますが、その間三重県下の病院で約160件の治験を獲得しています。2006年1月には、治験ばかりでなく臨床研究の支援を推進するため三重大学病院治験管理センターを臨床研究開発センターに改組 副センター長を兼務、2006年7月には臨床研究開発センター センター長を兼務しました。2007年1月～2013年 DWTI研究所（日高弘義CEO）の産学連携講座として三重大学大学院医学系研究科臨床創薬研究学 教授に就任。DWTIの社外取締役も務め、DWTIの株式公開及び運営の勉強をさせていただきました。総研Ⅱに居室を構えて6年間、血小板機能の臨床薬理学的研究を行いながら、センター業務として人材の整備と治験・臨床研究の支援の充実を行って参りました。2007年～2011年厚労省「治験活性化5ヶ年計画」に応募し三重大学病院が30拠点病院（応募件数154）の1つに選考され、臨床研究開発センターの人材整備・支援業務の充実を図りました。2010年総務省SCOPE「地域ICT振興型研究開発」の委託研究費を獲得、EDCである“臨床研究web支援システム（CReSS）”を2年間で構築し、現在、

約25件の臨床研究をwebサポートしております。
2014年1月には三重大学病院 臨床研究開発センター・教授（センター長）に就任しました。2014年12月からは、三重県、三重大学病院と共に提出した地域圏統合型医療情報データベース（Mie-LIP DB）整備事業（実施責任者：伊藤正明病院長）が「ICTを活用した地域医療ネットワーク事業」として採択され、実務者としてMie-LIP DBの構築を続け、2018年実用化段階まできており今後の皆様と協働で作り上げたいと考えております。2018年4月より三重大学病院 臨床研究開発セン

ター 特任教授（センター長）、2018年9月30日センター長を辞職しました。また、2018年10月31日付けで三重大学医学部附属病院・特任教授を退職。2018年11月1日より、近畿健康管理センター（KKC）三重事業所に就職し、健診、人間ドック、産業医を務めます。KKCは、既に三重大学病院の皆様にご支援を頂いておりますが、今後とも御協力の程、よろしくお願い申し上げます。しばらくは、研究員として微力ではありますが週1回臨床研究開発センターのお手伝いをさせていただきます。

トピックス

第30回日本医学会総会2019中部のプレイベントとして、 「市民公開健康講座」を開催

第30回日本医学会総会2019中部のプレイベントとして、2018年6月10日（日）に津市アストプラザ4階アストホールにて、「市民公開健康講座」が開催されました。

講座では、駒田美弘三重大学長、青木三重県医師会会長より挨拶の後、以下の講演が行われました。

・「第4のがん治療：免疫療法を知ろう」

講師：影山 慎一 先生

[三重大学大学院医学系研究科
遺伝子・免疫細胞治療学講座
教授]

座長：片山 直之

[三重大学大学院医学系研究科長
／血液・腫瘍内科学 教授]



・「今日からできる！認知症予防最前線」

講師：猪原 匡史 先生

[国立循環器病研究センター
脳神経内科 部長]

座長：富本 秀和

[三重大学大学院医学系研究科
神経病態内科学 教授]



・市民展示のご紹介

講師：村田 誠 先生

[名古屋大学血液・腫瘍内科学
准教授]
[第30回日本医学会総会2019中部
幹事長]



最後に、伊藤正明 三重大学医学部附属病院長／循環器・腎臓内科学教授 より挨拶があり、盛況のうちに閉会となりました。



ホール内の様子

当日は、あいにくの天気にもかかわらず、200名を超える市民の皆様にご参加いただき、講演の後には活発な質疑応答も行われるなど、非常に充実した講座となりました。

ご参加くださいました市民の皆様、また、開催にあたりご協力くださいました皆様に、厚く御礼を申し上げます。

専門医制度について

臨床研修・キャリア支援部長 須藤啓広

1. 専攻医希望者の登録手順と三重県内の採用者数

1) 専攻医希望者の登録手順

地域医療への懸念等により1年延期されていた新しい専門医制度が2018年4月からスタートした。国が定めた医師臨床研修を年度末に終了予定の臨床研修医で、内科、外科、小児科、産婦人科、精神科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、整形外科、脳神経外科、形成外科、救急科、麻酔科、放射線科、リハビリテーション科、病理、臨床検査、総合診療の基本19領域の専門研修を希望する者が専攻医希望者となる。専攻医希望者はあらかじめ希望する専門研修プログラム統括責任者に登録希望を伝えて研修内容や条件等について十分に理解を深め、調整を済ませたうえで一つのプログラムに登録する。その後、専攻医希望者は希望する各基本領域学会のホームページにアクセスし、各基本領域学会のホームページを窓口として日本専門医機構が作成した専攻医登録システムに入って登録することになる。

一次登録の登録期間は2017年10月10日～11月15日で、必要に応じて採用試験を行ったり、専門研修プログラム統括責任者と当該基本領域学会とで都市部への希望者の集中の有無の確認、調整等を行ったりする期間である登録確認期間2017年11月16日～11月30日を経て、2017年12月15日に採否が通知された。一次登録で研修先が決まらなかった

専攻医希望者は二次登録にまわることになる。しかし、二次登録で初めて新規申請する場合や専攻領域を変更することによってIDを取り直す場合は「専攻医登録システムID取得・変更理由書」にその理由を詳細に記載しなければならないため少々面倒であるうえ、5都府県（東京、神奈川県、愛知、大阪、福岡）については二次登録を受け付けない診療科もあるため、できれば一次登録するべきであろう。二次登録の登録期間は2017年12月16日～2018年1月15日で、2018年2月15日に採否が通知された。二次登録でも研修先の決まらない専攻医希望者は、三次登録の登録期間2018年2月16日～3月5日に応募し、3月15日に採否が通知された。

日本専門医機構は、2019年度の専門研修プログラムの専攻医募集について、2018年10月中旬をメドに開始する予定であることを明らかにした。専門研修プログラムの新規申請・変更等は4月末まで受け付け、その後、各基本領域学会による一次審査、都道府県協議会での調整、日本専門医機構による二次審査を行うことになる。

2) 三重県内の採用者数

三重大学医学部附属病院の2018年専門研修プログラムに一次登録した専攻医希望者は81名、二次登録応募者は13名、三次登録応募者が1名であり、採用者数の合計は95名となった。診療科別にみる

と、内科希望者が35名と最も多く、続いて眼科が7名、放射線科・麻酔科が6名、外科・小児科・脳神経外科・産婦人科が5名、整形外科・泌尿器科が4名、耳鼻咽喉科・総合診療・精神科が3名などと続いている。

入学者別にみると、地域枠A入学者23名（三重県医師修学資金未受給者3名を含む）、地域枠B入学者5名、三重県地域医療枠入学者5名であり、三重県医師修学資金受給者は60名であった。附属病院以外の基幹施設では市立四日市病院の内科専門研修プログラムに3名、外科専門研修プログラムに2名、伊勢赤十字病院の内科専門研修プログラムに2名採用されている。

2. 三重大学医学部地域枠制度で入学した者の初期臨床研修終了後の研修・勤務のあり方について

1) 背景

(1) 厚生労働省から医師修学資金受給者（地域枠学生等）に求める県内研修期間は、受給期間の1.5倍（三重県の場合9年）以上との見解が示された。

2) 専門研修開始以降の7年間（卒後3-9年）の研修・勤務についての基本的な考え方

(1) 7年間のすべての期間、三重県内にある病院での研修とする。ただし、専門研修以降、臨床能力向上や研究のために県外、あるいは国外の医療機関・医学研究機関に一定期間派遣されることや産休・育休については、三重県が示す条件を満たせばその期間の中断が認められる。

(2) 対象者の医師としてのキャリアデザインを保障する研修・勤務形態を実現できるよう配慮する。対象者の医師としての成長を支援するため、受入病院には指導体制の充実、院外での適切な研修機会の提供（学会参加、大学病院での先端医療の研修機会など）を求める。

(3) 地域枠B制度により入学した者には、推薦地域にある病院（推薦病院に限定しない）での1-2年程度の勤務（原則として2年とする。ただし、専攻する診療科での指導教育体制により短縮されることがある。勤務形態は、継続でなく複数回に分けての勤務でもよく、専門研修期間中、またはそれ以降のいずれでもよい）を求める。なお、地域枠B制度で入学した者の専門研修の場合、推薦病院が専門研修の場を提供できる場合は推薦病院を研修病院に含める。しかし、推薦病院が専門研修機会を提供できない場合、推薦地域内にある研修可能な他の病院で研修することを認める。さらに、推薦地域内での専門研修が難しい場合は、三重県内の他の地域にある病院で研修することとする。

(4) 地域枠A制度並びに三重県地域医療枠制度により入学した者には、三重県内の医師不足地域*にある病院での1年程度の勤務（勤務形態は、継続でなく複数回に分けての勤務でもよく、専門研修期間中、またはそれ以降のいずれでもよい）を求める。

(5) 三重県医師修学資金を受給していない地域枠制度により入学した者に対してもこの方針を適応する。

(6) 三重大学医学部地域枠以外の三重県医師修学資金受給者について、三重県の方針として地域枠A/三重県地域医療枠制度により入学した者と同じ研修・勤務の方針をとる。

(7) 三重県内の医師不足地域*は、厚生労働省が2018年度中に医療法を改正し、新たに定める「医師偏在指標」に基づく「医師少数区域（仮称）」を基本とする。

*医師不足地域

2018年3月時点では、地域枠B入学者推薦地域を医師不足地域と考える。

地域枠B入学者推薦病院：紀南病院、尾鷲総合病院、三重県立志摩病院、伊賀市立上野総合市民病院、岡波総合病院、名張市立病院

尚、地域枠Bの推薦病院となることのできる松阪地区3病院は、医師不足地域にある病院とはいえないため、地域枠制度にて入学した者が松阪市周辺の医師不足地域（旧飯南郡、多気郡、度会郡）にある医療機関への診療応援、市町が実施する保健事業などに従事することでこの対象に含めることとする。

3) 診療科事情に配慮した研修・勤務形態の提案

専門研修プログラム・診療科により勤務病院や地域医療への貢献の形態が異なるため、医師不足地域にある病院での勤務を一律に規定することは難しいと思われる。

専門研修プログラムが医師不足地域にある病院での研修を含むか否か、および地域医療への貢献の形態により診療科を以下の3グループに分ける。

- ①グループ：専門研修、およびその後の勤務で医師不足地域での常勤医としての病院勤務が含まれているプログラム・診療科。
- ②グループ：専門研修では医師不足地域での病院勤務が含まれていないが、専門医取得後に常勤医としての勤務の可能性があるプログラム・診療科。
- ③グループ：病理診断科、放射線科などの遠隔地システムや出張により地域医療への貢献を行っている診療科で、専門研修、およびそれ以降の勤務で医師不足地域にある病院での常勤医としての勤務を見込めないプログラム。

この区分に従って、専門研修およびその後の勤務での地域医療への貢献のあり方や期間を以下の

ように提案する。

- (1) ①グループのプログラム・診療科では、専門研修期間中、または専門研修終了後のいずれか、あるいは両期間で医師不足地域にある病院での常勤医としての勤務を行う。勤務は複数回に分けて行うことができる。
- (2) ②グループのプログラム・診療科では、専門研修終了後に医師不足地域にある病院での常勤医としての勤務を行う。勤務は、複数回に分けて行うことができる。
- (3) ③グループのプログラム・診療科では、医師不足地域にある病院への1-2週に1回程度の診療応援を一定期間行うことで地域貢献を行ったとみなすことができるものとする。この場合、地域枠Bにあつては1-2年間の勤務に相当する期間、地域枠A／三重県地域医療枠にあつては1年間の勤務に相当する期間、非常勤としての勤務を求めるが、医学部卒業後9年目終了までの期間とする（県外病院勤務などの中断の期間を除く）。また、三重県が1年に1回程度、当該医師および受入病院から地域医療貢献の状況についての報告を受ける。
- (4) 医師不足地域にある病院での勤務期間について、初期臨床研修期間はここで定める医師不足地域にある病院での勤務期間に含めない。

4) その他

大学として、地域枠制度での入学した者に対して卒前6年間の地域医療教育、卒後9年間のキャリア支援を行うが、卒後10年目からの勤務については、自治体、病院及び住民による三位一体の働きかけによって、医師不足地域等における勤務が促進されるよう関係者の協力を要望する。

第70回西日本医科学生総合体育を終えて

第70回西日本医科学生体育連盟理事長

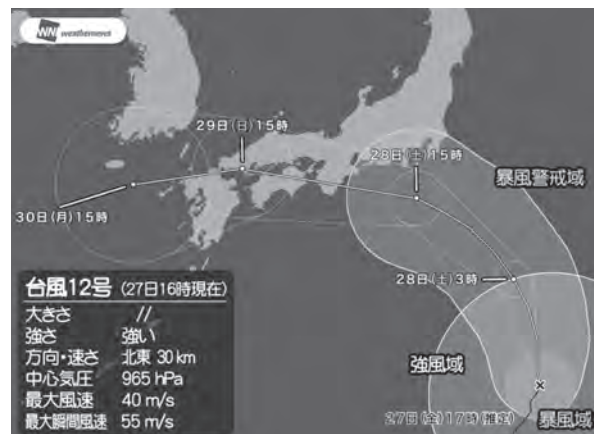
三重大学大学院医学系研究科 肝胆膵・移植外科学

教授 伊佐地 秀 司

三重大学医学部が主管校として開催されました第70回西日本医科学生総合体育大会は、平成30年7月28日（土）に津都ホテルで理事会、開会式、懇親会が行われ、競技（21競技、うち15競技は三重県内で開催）は8月5日～20日に行われ、大きな事故もなく無事終了することができました。三重大学は、5つの競技（バレーボール女子、卓球女子、剣道女子、陸上女子、空手女子）で優勝、1競技（バドミントン女子）で準優勝、3競技（弓道男子、陸上男子、バスケットボール女子）で3位とこれまでにない素晴らしい成績を収め、見事、西医体総合優勝に輝きました。これも医学部、三医会ならびに関係各位の皆さまの多大なご協力の賜物であり、この場をおかりして御礼を申し上げます。

まず、7月28日に行われました理事会、開会式、懇親会についてご報告と感想を述べさせていただきます。前回の医学部ニュースで70回大会開催のご挨拶の時に、「昭和53年に第30回の本大会を三重大学が主管しており、40年ぶりの記念すべき大会を再び主管させて頂くということには、三重大学のもつ運命的な強さを感じます」と書きましたが、この三重大学医学部の「運命的な強さ」示す出来事が7月28日の開会式で起こりました。台風12号が日本の観測史上初めての進路を取ったのです。すなわち、東から西、西から南へと進む異例のコースから“逆走台風”といわれましたが（図）、進路予測では28日の午後には三重県が暴風域に入る可能性が高く、27日には各大学から理事会等は予定通り開催されるのかとの問い合わせがありま

した。私は普段から愛用しているウェザーニューズの進路予測から津市に暴風警報が出るのは28日の夜になると確認しましたので、13時30分からの安全対策ワーキング、14時30分からの理事会、16時00分からの開会式、17時00分からの懇親会を予定通り開催することにしましたが、結果的にすべて予定通り開催できホッとしました。



安全対策ワーキングでは、以前から問題になっていた熱中症の危険度が上昇した場合の対応について、新たにフローチャートが提示され承認されました。すなわち、WBGT値（湿球黒球温度：Wet Bulb Globe Temperatureは、湿度、周辺の熱環境、気温の3つを取り入れたもので、熱中症を予防するための指標）が、31℃以上（高齢者においては安静状態でも熱中症が発生する危険性が大きい）になった場合、各チームのキャプテンと派遣医師が集まり、競技の続行・中断・中止を検討するWBGTカンファレンスを開催し、続行・中断・中止の判断をし、その旨を西医体運営室に連絡し、最終決定は理事長の私がすることになり

ました。

理事会では、三重大学は30回大会を記念した西医体30年史「西医体の歩み」を発刊したことから、今回の70回大会でも記念誌を発刊するため準備を進めてきましたが、当初の予算を超えることが判明したため、その分を今回の西医体運営費から支出をお願いしたいとの提案が出されました。これに対して、大会会長の片山医学部長から、第70回西医体記念誌の費用は、三重大学医学部の同窓会である三医会からすべて支払うので、ご心配なくと述べて頂き安心しました。これについては、理事長である私の失態でして、事前に運営委員長の穂積健太君と十分な打ち合わせをしていなかったことが原因ですので、この場を借りてお詫び申し上げます。

もう一つ問題として取り上げられたのは、ソフトテニス競技に関することです。平成30年6月9日、10日に開催されました春季東海医歯薬ソフトテニス大会（京都府立医科大学主幹）において、個人戦での選手紹介において大変不適切な言葉でアナウンスされたことから、地域住民から苦情が届けられ事件が発覚しました。そこで、京都府立医大の理事から本事件概要と学生の取組み状況について報告がありました。西医体においては、スポーツマンシップとフェアプレーの重要性を強調した運営プロトコルを作成し、参加全大学での同プロトコルの共有等を行い二度と同様の事件がおこらないよう対策を取ることにになりました。なお、個人的にソフトテニス競技について情報を収集したところ、個人戦で各選手の紹介を不適切な言葉でアナウンスする風習は10年ほど前からの行われ、西医体でも行われていたようです。今年、ソフトテニス競技が開催された兵庫県神鍋高原とラグビー競技が開催された場所が近距離であったため、当科のラグビー派遣医師がたまたまソフトテニス大会を見学に行ったところ、個人戦では縫いぐるみを着て参加している選手がいるのでびっ

くりしたことを教えてもらいました。ソフトテニスのOBの先生には、是非、この事実を再確認して頂いて対策を取って欲しいと思います。前回の医学部ニュース「70回大会開催のご挨拶」でも述べたことですが、「70回大会のスローガンは西医体～心技体の三重奏～です。心（こころ）・技（わざ）・体（からだ）の三つを充実させ、これらの調和と統合による三重奏により、素晴らしい体育競技が生まれます。」。すなわち、競技をすることは、「心の鍛錬をする」ことであるということが全く抜け落ちているためと思います。

開会式には、鈴木英敬 三重県知事、前葉泰幸 津市長、駒田美弘 三重大学学長、井村正史 三医会会長を来賓としてお迎えし、鈴木知事および前葉市長からそれぞれ祝辞を頂きました。鈴木知事からは、今回は全国高等学校総合体育大会が東海総体として7月26日から8月20日まで開催され、三重県でも多くの競技が開催され、西医体と開催期間が正に重なっているためご迷惑をかけるが、西医体の成功を祈ると共に、少しでも多くの方が三重県の観光地を訪れて欲しい旨のご挨拶がありました。前葉市長からは、昨年10月に開館したサオリーナが今回の西医体では卓球と剣道競技で利用してもらえるが、この施設名は津市出身であるレスリング選手・吉田沙保里に因んだもので、単なる愛称ではなく「津市産業・スポーツセンターの設置及び管理に関する条例」に基づく正式名称でなる旨のご挨拶を頂きました。

懇親会には、三重大学医学部教官並びに三医会から20数名、参加44大学の各理事、第69回大会主幹の山口大学から学生7名、第71回主幹の関西医科大学から学生11名、第72回主幹の鳥取大学から学生2名、三重大学から学生20名余りの総計104名余りの参加者のもとに盛大に開催されました。17時ごろには、外は台風の影響もあり少し風がでてきましたが、懇親会終了の19時でもまだ台風の影響はそれほどではなく、参加者の皆様は全員、

無事、帰宅できました。

8月8日から多くの競技が開始されました。今年7月中旬から最高気温が38度を超える日が西日本を中心に連日みられ、8月に入っても状況に大きな変化はなく、競技が開始されるとWBGTが31度を超える競技が続出し、状況によっては競技の中止も覚悟しなくてはと思っていました。早速、8日の午前10時ごろに硬式テニスの三重大コートからWBGTが31度を超えたのでWBGTカンファレンスを開催して競技の結果、競技続行としたが理事長の最終判断をお願いするとの連絡があり、わたしは現場の判断を重視し、競技続行と決定しました。その後も他の3箇所のテニスコートからも同様の連絡が入り、いずれも競技続行の決定をしました。テニス競技は8月16日までありましたが、連日、同様のこととなりました。その他は、ラグビー場から1回の連絡があり、これも競技続行の決定をしました。私の決定に問題がなかったかについては、安全対策委員長の松井勇人君から先日、事故に関する報告書をみせてもらいました。心配された熱中症は5件と例年より極めて少なく、それも硬式テニスやラグビーではなく、浜松で開催された水泳競技がほとんどであり、私の判断は幸運にも問題を起こしていなかったことがわかり、ホッとしました。外傷は骨折（疑い含む）8件、靭帯損傷7件、打撲12件、捻挫13件などの計64件と例年並みの発生件数で、いずれも通院1～3日であり、重大な事故の発生はなかったとのこと。今大会では、各競技のOBの先生にはお忙しいところを派遣医として大会運営にご協力をして頂き誠にありがとうございます。さらに、大会会場の近隣病院には救急搬送では大変お世話になりました。この場をお借りして御礼を申し上げます

私は三重大学医学部剣道部のOBでかつ顧問を務めており、今回の剣道競技の大会会長を務めさせて頂きましたので、その状況をやや詳しく述べ



させて頂きます。剣道競技は8月18、19日に津市のサオリーナで開催されました。サオリーナは私の経験したなかでは最高の剣道競技場でした（上図写真：1日目の大会開始前の稽古風景です。これもみて自分も剣道が続けていることから、なぜか緊張し唇が乾くのを感じました）。1日目は医学部生の個人戦がメインアリーナで8面のコートで行われ、サブアリーナではコメディカル大会（1日のみ）が4面のコートで開催されました。従って、大会1日目は12面のコートで試合を行うことから、三重県剣道連盟から80数名の審判員を動員して頂きました。私は大会会長として、試合場より一段高い本部席にいましたので、ほぼすべての試合を見渡すことができました。個人戦は制限時間が男子4分、女子3分で、勝敗が決しない場合は無制限の一本勝負となります。今回の大会では、山口大学の選手（4年生）が印象的でした。審判長である岡田一義範士八段も、この選手は決勝戦まで行くでしょうと予測されていましたが、その通りになりました。しかし、かれの唯一の欠点は勝負が遅いことです。決勝戦までの試合はすべて延長戦で勝ち抜き、それも試合時間は10分を超えるものでした。決勝戦は岡山大学の6年生（二刀流で、前大会の優勝者）との戦いとなりましたが、やはり延長戦となり20分を超えました。今回の大会では熱中症のこともあり、延長戦が20分を超えた場合は5分の休憩をいれることにしま

したので、5分の休憩をして試合再開となりました。私はそのとき、休憩をとったら前大会優勝の二刀流の選手が有利になると予測しましたが、その通り開始30秒で見事な胴を取り、2連続個人優勝を達成されました。多くの延長戦（そのほとんどは山口大学の選手）が行われたことから、1日目は予定終了時刻を2時間余り超過してしまいました。次回、主管の関西医科大学には、来年も個人戦は同じような状況となることが予想されるので、試合時間を長めにとるように申し送りをすることにしました。

大会2日目は女子と男子の団体戦でした。団体戦となると、前日の個人戦とは異なり、コート外からの声援が激しくなりました。剣道は「礼に始まり礼に終わる」といわれ、常に相手に対して礼節を保つ（敬意を表す）ことが求められ、これは観戦者にも求められます。従って、剣道では、拍手だけの応援がマナーとなっています。団体戦が開始されたから1時間ほどしたところで、岡田審判長が全試合を一旦中断させて、「声を出しての応援はせず、拍手のみとすること」と注意がなされました。これ以降、全く声援は聞こえなくなりました。

さて、団体戦は女子3名、男子5名で戦うのですが、個人戦と違い制限時間内で勝敗が決しないときは引き分けとなり、勝数か、取得した本数の多い方が勝ちます。従って、団体戦では、まず最低引き分けを狙った負けしない勝負をします。三重大学女子団体戦は正に負けない勝負に徹して、1勝2引き分けで次付きと勝ち抜き、見事、優勝を勝ち取りました（写真）。今年、三重大学医学部剣道部は創立45周年ですが、初めてのことです。男子団体戦も健闘し、ベスト8の好成績を収めることができました。これも、1年前に剣道部の新入部員歓迎コンパの席で、医学部剣道部の剣道指導をして頂いている安藝俊彦先生が、「西医体団体優勝をめざすぞ」と掛け声をかけてもらいまし



た。この時、部員がキョトンとしていたので、安藝先生が「優勝を目指さない限り優勝なんかありえない」といわれました。正にこれが現実となったわけです。今回、改めて私は、剣道競技のみならず、あらゆる競技、すわなち真剣勝負の素晴らしさを実感することができました。私たちは、柔道家、道長伯氏（1912～2002、講道館7段、フランス柔道連盟9段）が述べられた「柔道の最終目的は心技体の錬成であり、それによって立派な人間になることである」という言葉をもう一度、西医体の全競技の選手および関係者に伝えて、さらなる西医体の発展につなげてほしいです。

最後になりますが、今回の医学部4年生が中心となって組織された西医体運営組織メンバーの諸君に心から御礼を申し上げます。ご苦労さまでした。さらに、本大会が無事終了できたのも、ご協力賜りました多くの関係各位、特に医学部の皆様からの沢山のご支援の賜物であり、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。



第70回西日本医学生総合体育大会 総合優勝

第70回西医体 運営委員長

医学科4年 穂積健太

2018年8月（冬季競技は3月）、第70回西日本医学生総合体育大会（以下西医体）が開催されました。西医体には毎年、（石川県、岐阜県、愛知県を境にした）西日本に所在する44大学の医学生が参加しています。スポーツ系部活動に所属する医学生にとって、西医体は本当に特別な存在です。

三重大学は、直近4年で2度の総合優勝を果たすという好成績を残してきました。この成果は代々の先輩方が積み重ねられた歴史と、それを引き継ぎ日々努力した各部活の選手の賜物であると思います。また、記念すべき第70回目の西医体を三重県で行うことができたのも、たくさんの関係者の方々のご理解、ご協力あってのことです。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

部門別成績

今大会でも第66回大会・第68回に続き三重大学が総合優勝を果たしました。その原動力になったのは、西医体9連覇中の卓球女子種目をはじめとした女子種目の活躍でした。ベスト8以上の競技種目は以下の表のとおりですが、第68回での優勝した5競技がすべて女子種目だったことと合わせて、近年の三重大学の総合優勝には女子選手の活躍が大きく貢献しています。私は、卓球部に所属していてその内情を語ると、大学に入る前からその競技で大きな成果をあげていた選手もいますが、高校時代はそれほどでもなかった選手、また大学から競技をはじめた選手が日々西医体に向けて練習を積んで、その力が合わさることで今回の結果になったのだと思います。今後も女子選手の活躍は続いていくと思いますが、それに負けないよう

優 勝	バレーボール（女） 卓球（女） 陸上競技（女） 空手道（女） 剣道（女）
準優勝	バドミントン（女）
第3位	バスケットボール（女）
	弓道（男）
	陸上競技（男）
ベスト8	ソフトテニス（女） バスケットボール（男） 空手道（男） 剣道（男）

に男子選手も頑張っていたらと思います。

第70回大会の主管を終えて

今年は、三重大学主管で西医体が行われました。前回の主管は第30回大会なので、実に40年ぶりの西医体の主管でした。

今年は酷暑に見舞われたり、様々なトラブルが発生したりしました。またインターハイ（東海ブロック開催）も同時期に行われたこともあり、様々な課題がありました。しかし、大会に関わった皆様のご理解・ご協力のおかげで、大会を終えることができました。

西医体は今年で70回目を数えるほどの歴史の中で、徐々に変化して、規模も大きくなってきました。今では参加校が44校、参加者17,000人を超える大きなイベントです。

また、今年で平成も終わり、また新しい時代が始まるという節目の時期でもあります。これから

も西医体がこの大会に関わる皆様の力でより良い
体育大会に進化し続けていくことを願っております。

さいごに

これまでに述べたように三重大学は近年素晴らしい成績を収め続けています。これは今までの先輩方や現役の選手が日々努力し、勉強にもスポーツにも励んできた結果だと思えます。しかし、今回私が感じたのは、素晴らしい結果は自分ひとりの力では出せるものではないということです。西医体の運営を通して、何か一つするにも誰かの協力が必要であるということを実感しました。また卓球をするにも、部活動を支援してくださっている方、指導をしてくださった先輩、場所を用意して

くれた方、ゲーム中審判をしてくれる方、好敵手、応援してくれる仲間…たくさんの方の応援、協力があっただけで自分が全力を出せるのだと気が付きました。これからも感謝の心を忘れずに、日々努力を重ねることで良い結果が生まれてくるのではないかと思います。

最後に、改めてご支援ご協力いただきました皆様に感謝の意を示し結びとさせていただきます。大会長の片山先生、理事長の伊佐地先生、三医会会長の井村先生、三医会副会長であり第30回大会の評議委員長の青木先生、第30回大会を主管した運営委員の先生方、三医会事務局の廣さん・前田さん、加納さん・牛場さんをはじめとする学務の皆様、総務課の皆様に厚く御礼申し上げます。

研究室研修学生委員活動記録

2018年4年生・研究室研修学生委員

井口 宙樹・稲本 誠也・岡本 果林
柿本 彰・金地 真生・三田遼太郎
島 涼介・白木 健太・中山 堯之
西峯 朋加・丹羽 将大・森 咲子
山川真由子・山田 竜也・山本 晃樹

研究室研修専門委員長

島岡 要（～2018年3月）

西村 有平（2018年4月～）

本学医学部では、研究室研修の運営に学生が参加することが誇るべき伝統になっている。この学生委員会活動は自主性を育み、リーダーシップを身に付ける貴重な機会である。この伝統を継続するための記録として、2017年～2018年の研究室研修学生委員の活動を報告する。

研究室研修学生委員会キックオフミーティング

2017年5月に、島岡先生と研究室研修学生委員

に立候補した3年生9名、上級生の研究室研修学生委員2名でキックオフミーティングを行った。ミーティングでは最初に委員の自己紹介を行った後、島岡先生から研究室研修の概要と学生委員の具体的な活動内容の説明を、上級生委員からは学生委員会活動を行う上での具体的なアドバイスを頂いた。その後、配属研究室マッチング委員として金地、西峯、森を、講演会委員として井口、岡本、島を、プロGRESS発表会委員として柿本、白木、山川を選出した。さらに、配属研究室マッチング委員長・学生委員会リーダーとして西峯を、講演会委員長・学生委員会副リーダーとして井口を、プロGRESS発表会委員長・学生委員会副リーダーとして白木を選出した。

配属研究室マッチング

マッチング委員の大きな活動は7月に行われる予備調査と9月にある本エントリーである。予備

調査では課題説明会や研究室見学を通して希望の研究課題をアンケート調査し、各々の研究課題がどの程度人気があるかを把握してもらった。そして、この予備調査の結果をもとに本エントリーを行い、所属研究室を決定した。マッチング委員3人は5月から9月にかけて予備調査、本エントリーについてミーティングを数回行い、主要部分について以下のように取り決めた。

1. 予備調査

(1)日程

調査期間を7月6日(木)課題説明会終了後～7月13日(木)に設定し、結果は7月14日(金)17:00にムードルにて公表した。

(2)方法

去年同様、グーグルフォームを用いてアンケート調査を行った。学籍番号、氏名、新医学専攻への在籍有無、希望研究室課題(第2希望まで)をアンケート項目として作った。この回答フォームのURLは研究室ムードルと学年LINEにて告知し、学年全員が参加できるように配慮した。

(3)回答結果の公表

各研究課題の第1、第2希望者の人数のみをpdfファイルでムードルに公開した。集計は研究室研修学生委員全員で行った。

(4)予備調査の学生への告知について

パワーポイントを使用し、予備調査の概要、回答方法、結果公表方法、注意点について説明会を6月13日(火)に行った。スライドはハンドアウトとして配布し、ムードル上にも掲載を行った。予備調査期限の注意喚起をLINEで適宜行った。

(5)新医学専攻在籍者について

新医学専攻に在籍している学生には、7月31日(月)までに島岡先生と研究室の担当教員と委員代表に連絡するように予備調査の説明とともに周知した。継続、変更に関わらず連絡が必要であることを強調した。新医学専攻の研究室にそのまま

籍する学生には本エントリーへは参加しないように伝えた。一方、在籍者で別の研究室を希望する場合は一般学生と同様にマッチングに参加してもらった。

2. 本エントリー・マッチング

(1)日程

本エントリー期間は9月4日(月)～9月6日(木)に設定し、結果は9月7日(金)に公表した。第1希望による調整を9月14日(木)までに行い、第2、第3希望による2次マッチングを9月15日(金)～20日(水)、2次エントリーとマッチングを9月21日(木)～9月29日(金)で行った。

(2)方法

予備調査同様、グーグルフォームを用いて行った。学籍番号、氏名、新医学専攻の在籍有無について回答してもらい、予備調査とは異なり希望する研究課題を第3希望まで選択してもらった。この回答フォームはムードル上とLINE上に掲載した。

(3)結果公表

本エントリーについては結果をムードルと学籍メールで公表するとともに、全学生と研究課題を提出していただいた先生に学籍メールで1次マッチング結果を送付した。集計、先生方への連絡は研究室研修学生委員全員で分担して行った。1次マッチングで漏れた学生に対して、第2、第3希望を用いた2次マッチングの結果を個別に連絡した。2次マッチングでも決まらなかった学生を対象に定員に達していない研究課題で2次エントリーを行い、マッチングを行った。2次エントリーの結果は先生の下承が得られ次第、学籍メールで連絡を行った。2次エントリー終了後、希望学生のいなかった研究室の先生にお知らせとお詫びの連絡を行った。

(4)本エントリーの学生への告知について

パワーポイントを使用し、本エントリーの概

要、回答方法、結果公表方法、注意点について説明会を9月4日(月)に行った。そのほか本エントリー期限の注意喚起をLINEで適宜行った。昨年、挨拶に行っていない学生が研究室の先生からお断りされた件を踏まえて、課題説明会後やLINEで、夏休みの間に興味のある研究室には見学・挨拶に行くように呼びかけを行った。また、2次エントリーに回った学生には研究室に挨拶に行ってから希望の研究室を提出するように呼びかけを行った。

講演会

今年度の講演会では、三重大学医学部附属病院臨床麻酔部教授であられる亀井正孝先生と三重大学生物資源学研究科の増田裕一先生にお越しいただいた。1時間という短い時間の中で、亀井先生には、これからの大学生活、そして人生プランを考えるうえで非常に大事なことをお話していただき、増田先生には授業で習ったことがどのように実際に研究で使われているのか座学から実践へのつながりを分かりやすくお話しいただいた。

講演会準備班が結成したのが2017年5月、実際に講演をしていたのが、2017年10月末と2018年2月末である。その間の主な仕事としては、候補の先生のリストアップ、候補の先生の絞り込み、依頼文の作成、先生へのアポイントをとる、講演の場所日時の設定、学生への広報がある。候補の先生のリストアップに関しては、今年は研究室委員だけではなく生徒の意見もくみ取ろうとい



う趣旨のもと、生徒へアンケートを取った。さまざまな方が候補に挙がったが、講演料等の経済面などから実現可能な方、なおかつ学生にとって有益な講演会になるような方に絞っていき、10名ほどの候補者が残った。その後、島岡先生にご意見をいただき、最終的に亀井先生、増田先生のお二人に依頼をすることとなった。

はじめにアポイントメントを取った。メールにて依頼の文章を委員で考えた。その際に、企画の趣旨を詳しく説明し、どんな内容の講演を期待しているのかを含めて「自分の思い」を400字以上で書きなさい、情熱が大切であり、自分がそのメールをもらったとしたら、是非協力したくなるようなメールを書きなさいと島岡先生にご指導いただいた。島岡先生に内容を添削してもらったのち、送信した。亀井先生、増田先生のお二人とも快く引き受けてくださった。その後、講演の場所、日時の設定を行った。学務にて、空き教室の状況を確認したのち、3年生の授業の時間割と先生のご都合を考えて、夕方の17時から第二基礎講義室で行うことになった。また学務のかたにお願いをして、講演会の告知を学内メールで流していただいた。

講演会の当日の仕事は会場の設営(照明、空調、プロジェクターの調子の確認等)、講演をされる先生のお迎え、最終打ち合わせ、そして講演会が円滑に進むように司会進行をすることであった。講演時間を50分取ったのち、質疑応答の10分程度



取った。講演会の後、先生と委員で交流をした。最後に講演をしていただいたお礼として、手作りのお菓子をお渡しして、先生をお見送りし、講演会委員の仕事を終えた。

プロGRESS発表会

プロGRESS発表会へ向けた準備は、2018年4月27日に学務課・刀根さんより研究室研修学生委員の追加募集を行ってもらったことから始まった。この追加募集により6名（稲本、三田、中山、丹羽、山田、山本）増員し、6月1日にミーティングを行った。ミーティングにおいて、全15名を総務係、アワード係、プログラム係に配属し、それぞれの係の中でリーダーを決定した。以下、各委員の活動について報告する。

1. 総務係

総務係は稲本、柿本、三田、山本が担当し、リーダーは柿本が務めた。事前に必要なものを昨年プロGRESS発表会を参考にしながら決め、リストを作成し、学務に届けた。今回使用したものはベル、ストップウォッチ、投票用の箱、ポインターの電池、ガムテープ、セロハンテープであった。それぞれの部屋に予備を含め用意した。各部屋のポインターは点くかどうか事前に確認した。当日は、審査員、先生席、座長、演者、次演者、Discussion Leaderの席、および後ろの席のためのreserved席を準備し、会場の準備を行った。また、本番中に問題が発生する可能性があるので、できることは準備することが必要である。特にパソコンの接続には注意が必要である。

2. アワード係

アワード係は井口、金地、中山、山川が担当し、リーダーは山川が務めた。今年度プロGRESS発表会では例年通り、審査員である教員の方々に加えて学生による投票も行った。賞の名前を決める

ところから始め、2018年度は「MIE Award 2018」（M=Most、I=Impressive、E=Enthusiastic）と定めた。アワード係4人で各自賞の名前を考え、話し合いの結果決定し、他の研究室研修委員の確認を得た。

今回の投票形式は1日目と2日目で色の異なる投票用紙を用意し、2名まで発表者を記入できるようにした。またこの投票用紙の提出を以って出席とした。他の会場の学生の発表も聴取して医学研究への興味・関心を深めることができるように、今年度も会場の移動の規制はしなかったが、想定よりも会場を移動した生徒が少なかったことが今年度の反省点である。

2018年度は基礎第一講義室・基礎第二講義室・看護棟3階第二講義室の3部屋で行い、会場の移動の規制はなかったので両日全部屋で獲得票数上位10名を「MIE Award 2018」表彰対象者とする予定であったが、8位が4人となったので12名を表彰対象者とした。成績優秀者上位8名への景品は図書券、多機能ボールペンとし、残り4名の成績優秀者には図書券か多機能ボールペンを選択してもらった。

7月19日の発表会終了後、17時30分より基礎第一講義室にて表彰式を行った。表彰式のおおよその流れは以下の通りである。

- 1 成績優秀者（「MIE Award 2018」受賞者）
12名の発表
- 2 受賞者への景品贈呈
- 3 受賞者の記念写真撮影

3. プログラム係

プログラム係は発表会のスケジュールを先生方の都合に沿ったものに作成する係（スケジュール係：岡本、森）、学生から提出されたabstractをまとめる係（abstract係：山田、島、丹羽）、最後に全体の校正をする係（まとめ係：白木）の3つの係に合わせて作業を行った。プログラム係の

リーダーは白木が務めた。

6月6日のミーティングにおいて、西村先生より研究室研修の配属名簿を頂くことから作業は始まった。それと同時に、成田先生から審査員の先生の都合を聞いてもらい、各日程の審査員の先生を選出していただいた。6月7日に西村先生よりすべての担当の先生に対し、プログレス発表会の日程希望のメールを送信していただき、その内容はリーダーにも送信していただいた。

審査員の先生の日程、担当の先生の希望を受け取った後にタイムテーブルの作成を行った。タイムテーブルの作成における優先順位は以下のとおりである。なお、一人の先生に対して複数の学生がついている場合は、その学生が連続するように配置した。

1. 審査員の先生及びその先生に配属されている学生を各日程で各教室に振り分ける
2. 日程希望のあった先生およびその先生に配属されている学生を希望日時に各教室に振り分ける
3. 上記1. および2. を満たしたうえで、研究室研修学生委員が各日程、各教室に均等（2名もしくは3名）になるように学生委員を振り分け、座長を決定する

また、並行してディスカッションリーダーを定めた。ディスカッションリーダーは、昨年度同様に同じセッション内で回すように定めた。

以上のようにスケジュール係が作成したスケジュールを基に、abstract係によってabstractのページが作成された。ほとんどの学生が期限までに指定されたフォーマットでabstractを提出していたのでabstractのページ作成に関して大幅に遅れはなかったが、この係を3人の学生で担当していたためフォントや書式が人によって微妙に異なるものとなってしまったのが反省点である。

最後に西村先生よりいただいた挨拶文と学生委員の挨拶、アワード係の作成した発表会の説明

文、スケジュール係の作成したスケジュール表、abstract係の作成したabstractのページを一冊のプログラムにまとめた。印刷をお願いした学務課の刀根さんは誤字・脱字、その他書式が揃っていない点などを的確に指摘してくださりプログラム作成に非常にご尽力いただいた。このようにして多くの人の協力を得ながらプログラム作成を完了させることができた。

プログラム完成後は西村先生のご指導の下、学生委員全員で打ち合わせ・リハーサルを行い本番に備えた。このように綿密な準備を行ったため本番では大幅な遅れやトラブルの発生は無く、円滑に発表会を運営できたように思う。

反省点としては、プログレス発表会にお越しいただく先生方にスケジュールの連絡が遅くなってしまったことである。来年以降はそもそもの希望日程をうかがうタイミングを早め、タイムスケジュールが完成した時点で一度、すべての先生に確認をお願いするべきだと感じた。来年以降の学生委員には今年度の反省点を活かしてより良いプログレス発表会にしていっていただきたい。

その後

この原稿が医学部ニュースに掲載される頃には、研究室研修のまとめの課題であるプログレスレポートが作成され、無事に単位を取得できている予定である。

審査員をしてくださった後藤英仁先生、島岡要先生、野阪哲哉先生、大隅貞嗣先生、奥川喜永先



生、広川佳史先生、小澤周二先生、橋詰令太郎先生、山根利之先生、垣内愛加先生、王淑杰先生、

彦坂茉莉先生、朴恩正先生および研究室研修を一年間ご指導いただいた先生方に感謝いたします。

三重大学医学部附属病院 リウマチ・膠原病センター 開設1周年記念 市民公開講座『リウマチ 膠原病って、どんな病気?』を主催して

三重大学医学部附属病院 リウマチ・膠原病センター 中 島 亜矢子



2017年9月に、三重大学医学部附属病院にリウマチ・膠原病センターが開設され、1年が経ちました。着任当初より、開設1年目ころには市民・県民の皆様にも、広くリウマチ膠原病について知っていただくための公開講座を開きたいと思っておりましたが、2018年9月17日に、三重県総合文化会館小ホールで開くことが出来ました。

3連休最終日の午後開催にもかかわらず、250名の定員のところ、なんと530名を超える方々からの応募がありました。三重大学にリウマチ膠原病を専門に診療する科が出来たのも初めて、リウマチ・膠原病センターが公開講座を主催のも初めてですので、市民・県民の皆様にもうまく案内のポスターやチラシが届くのか、連休最終日の午後に実際に来てくださるのか、リウマチ膠原病にどのくらい関心をお持ちなのか不安でしたが、予想以上の応募者数から皆様の関心の高さとこれまで大学としてリウマチ膠原病に関する情報発信が不十分であった現状を知りました。

当日のプログラムは、講演2つとパネルディスカッションとしました。講演1は、私が『膠原病って どんな病気?』、講演2は、私の30年来の恩師であり三重大学を1980年に卒業され現東京女子医科大学病院膠原病リウマチ内科学 教授でいらっしゃいます山中寿先生が『関節リウマチ治療はこんなに進んだ』と題して行いました。パネルディスカッションは、様々な形でリウマチ膠原病診療に携わって頂いている三重大学医学部附属病院の腎臓内科、皮膚科、整形外科を代表して石川英二先生、波部幸司先生、若林弘樹先生に各科でのリウマチ膠原病診療をお話し頂き、Q and Aコーナーを開きました。また開会のご挨拶を大学院研究科科長の片山直之先生、閉会のご挨拶を医学部附属病院長の伊藤正明先生にお願いしました。先生方みなさまお忙しい中、快くお引き受けくださりありがとうございます。この場をお借りして、心から御礼申し上げます。

私は、司会、演者、座長と、ずっと壇上から聴講席を見ることができました。当初の予定の2時間を少し延長する結果となりましたが、みなさま前を向いて最初から最後まで聞いてくださっていたことに、胸が熱くなりました。今後も市民・県民のみなさま方にリウマチ膠原病の情報を広く発信していくことは、三重大学リウマチ・膠原病センターの責務であると痛感いたしました。最終的には、当日参加希望の方も含め多くの方々のご参加をいただきました。ありがとうございます。

ございました。

センター主催の公開講座を開いて良かったことがあります。1つ目は、準備の過程で三重大学内のいろいろな科の先生方、事務の方々と知り合えた事です。2つ目は、「イベントですから」とおそろいのTシャツを作り会に臨んだのですが、そのTシャツ効果か、教室員もそれぞれの仕事をその場に依じて考えながら果たすなど新たな一面も見せてくれ、連帯感と頼もしさを一段と強く感じられたことです。

センター開設から早くも1年。多くのニーズがありながらも、何分にもリウマチ・膠原病医師が足りません。リウマチ膠原病疾患に興味をお持ちの先生方、どうぞお気軽にお声をおかけください。一緒に三重県でのリウマチ膠原病診療を盛り立てていけるようにしていきたいと思っております。

本市民公開講座開催に際しては、多くの方々に

ご尽力を頂きました。特に三重大学医学部附属病院、伊藤病院長、および循環器腎臓内科の秘書の方々、協賛等ご協力いただきました製薬企業の方々には、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

多くの皆様方のお力で、無事リウマチ・膠原病センターは2年目を始動しております。皆様の、一層のご指導、ご支援を賜れますよう、よろしくお願い申し上げます。



医学科オープンキャンパス開催報告

医学・看護学教育センター、アドミッションセンター 櫻井洋至

平成30年8月9日(木)開催 医学部医学科オープンキャンパスについて	
(第一部) 三重大学医学部医学科の紹介 13:00-14:30	
【場所】三慧ホール	
1. 学部長挨拶(学部長)	
2. 医学部附属病院の紹介(病院長)	
3. 医学部入試について(入試委員長)	
4. 医学部での医学教育の紹介(教務副委員長)	
5. 三重県医師修学資金の紹介(三重県担当者)	
6. 在校生からのエール(医学科学生)	
7. 質疑応答	
(第二部) 模擬授業、実習報告など 14:45-15:45(各60分)	
1. 臨床講義(100)「ヒトとイモリは何が違うのか?〜カタチと機能を取り戻す治療戦略〜」	
【場所】臨床第3講義室	
【講師】成島三長 教授	
2. 基礎講義(100)「Webアプリケーションを用いた薬理学実習」	
【場所】臨床第2講義室	
【講師】西村有平 教授	
3. 医学部第6年海外臨床実習報告(100)	
【場所】臨床第1講義室	
【講師】堀 浩樹 教授、医学科学生	
4. チュートリアル模擬授業(TBL)(40)	
【場所】多目的講義室	
【講師】森尾邦正 助教 医学科学生	
5. 模擬実習	
1) スキルズ・ラボ(20)	
【場所】スキルズ・ラボ	
【講師】櫻井洋至 准教授 医学科学生	
2) 聴診法による血圧計測実習(24)	
【場所】多目的実習室	
【講師】太城康良 准教授	
3) 医学英語演習(20)	
【場所】基礎第1講義室	
【講師】タリン・マクラクラン 助教	
4) Basic Life Support(20)	
【場所】医学・看護学教育センター会議室	
【講師】きょうめい部	
※()内の数字は、受入れ可能数を示す。 いずれも、模擬授業終了後、医学科教員・学生との簡単な懇談を行う。	

オープンキャンパスプログラム式次第

2018年8月7日から9日にかけて、三重大学オープンキャンパスが開催され、医学科では8月9日の午後に行われました。

前半は、講堂の大ホールにおいて、片山直之 医学部長から医学部医学科についての説明があり、伊藤 正明 附属病院長から医学部附属病院の紹介がありました。また、成田 正明 入試委員長から医学科の入試について、影山 慎一 教務副委員長から医学科の教育内容について、三重県地域医療推進課の担当者から三重県医師修学資金貸与制度について説明があり、医学科学生の下村優莉奈さんより学生目線からの学科紹介とともに、参加者に向けてエールが送られました。



オープンキャンパス会場、山翠ホール

後半は、医学部校舎に会場を移して、8つのコースに別れて模擬授業、実習などを体験していただきました。

成島先生による臨床講義「ヒトとイモリは何が違うのか？～カタチと機能を取り戻す治療戦略～」では、講義終了後にstap細胞とiPS細胞の違いは何か？日本で倫理的な問題でできない、腕移植や顔面移植を行うとなったらどうしたら良いか？血が苦手だが医師になれるか？イモリがガンにならないのはなぜか？イモリは、冷凍保存しても生き返るのか？など高校生達から活発な質問がされました。

西村先生による基礎講義「Webアプリケーションを用いた薬理学実習」では、参加者が各自のスマートフォンやノートパソコンなどで、バーチャ

ルラットウェブというwebアプリケーション（三重大学教育GPにより開発された学習支援ツール）を使用して、ラットにアドレナリンやアセチルコリンをバーチャルに注射し、その結果、血圧や脈拍がどのように変化するかを視覚的に理解し、血圧や脈拍が異常になる仕組みと、その異常を正常化するための薬の作用を理解する体験授業が行われました。多くの参加者から、楽しい、理解しやすい、などの意見をいただきました。一方、バーチャルシステムの開発に必要な実験動物の存在に思いを馳せた意見もありました。バーチャルラットウェブの開発者である学生TA（医学科学生）と実習内容について教員と議論を重ね、学生目線での意見が実習内容の適切化に大きく貢献していることが指摘されました。

森尾先生のチュートリアル模擬授業では、本学医学科のカリキュラム、チュートリアル教育の概略を説明し模擬チュートリアルを行い、学生TA（医学科学生）への質疑応答が行われました。

堀先生の海外体験実習報告では、学生による海外臨床実習体験の報告と質疑応答などが行われました。

太城先生の「聴診法による血圧測定実習」では、高校生を6つの小グループに分け、各グループごとに学生TA（医学科学生）1名が付き添い、実習とともに高校生と医学科学生とが様々な質疑応



第一部医学科説明



スキルズラボ「手指消毒、手洗い」



きゅうめい部「Basic Life Support」

答を通じて交流を深めました。

スキルズラボでは、ケースシナリオに基づき様々なシミュレーターを用いた体験学習を通して患者さんの生理や病態を理解するとともに診断、検査、治療へのプロセスを5つのグループに別れてローテーション方式で学習しました。各グループには学生TA（医学科学生）が付き添うほか、各ブースにも学生TAや外国人研究者（ピセンテ・カリーヨ先生、メキシコ）や大学院生（チパイラ・ジャクソン先生、ザンビア）、ほか大学院生、職員が講師として参加し、高校生が様々な教職員、学生と交流を深めました。

そのほか、出産後の育休中にも関わらずボランティアとしてタリン マクラクラン先生（教育センター）が医学英語の体験授業を行っていたほか、きゅうめい部からも毎年恒例のBasic Life Support (BLS) の実習を行っていただきました。

まとめと課題

オープンキャンパスは単に優秀でやる気のある人材（新入生）確保のための入学前教育ということだけでなく、将来の職業選択としての医学、生命科学領域への探究心の確認やモチベーションを高める上でのキャリアパス教育として大学がもっとも早い時期に実施しているものと理解しております。また高校生や受験生、その保護者にとって

は、三重大大学の校風や学生生活、受験勉強の工夫や医学部進学へのモチベーションをいかに高めるかなど、多くの疑問や不安を抱えて参加しているに違いなく、その意味では教職員だけでなく、できるだけ多くの学生と交流を持っていただきたいと考えてきました。

オープンキャンパスの企画、実施にあたっては、夏季休業中で学生TAの確保に毎年苦勞しておりましたが、さらに今年は西医体の当番校ということで、学生を取り巻く環境は特に厳しく、学生TAの確保に大変苦勞した先生方もおられました。一方で、特に後半の企画については、高校生への公平性の観点から大学ホームページでの事前登録による定員調整を行っているとのことでしたが、台風の接近を始め例年複数の原因によると思われる当日の参加者の増減、抽選で当たらなかった他のプログラムへの変更希望者の存在など、年に一度の企画に対して、全ての参加者（高校生、企画に協力いただく受け入れ教職員、学生TA）の満足度を高める工夫が必要と思いました。

また、来年は新たな国民の祝日が導入され、学年暦も変更となる見込みで、学生の夏休みがさらに短くなることが心配されております。ただでさえ、国際基準での医学部教育の改善を目的にカリキュラム上夏休み期間が削減され、部活動や自己学習への負担が増えている医学科学生の現状はオープンキャンパスの健全な運営にも逆風となっています。今後も学生や医学教育について理解の深い教員の参加、医学科学生の参加をよろしくお願い申し上げます。今年の医学科オープンキャンパスにおきましては、厳しい状況の中、ご関係の先生がたや職員の皆様の努力にもまして、多くの学生TAの皆さんの協力の甲斐あって、例年にもまして盛況に終わったことを感謝申し上げ、報告とさせていただきます。

看護学科オープンキャンパス

看護学科広報委員会委員長 片岡三佳



2018年8月9日に看護学科のオープンキャンパスが開催されました。看護学科では、新入生のオープンキャンパス参加の割合が高いこともあり、看護学科の教職員、看護学生にとって重要なイベントになっています。

年々、参加者数の増加があり、学舎への収容人数のキャパシティの問題、さらにきめ細やかな対応をしたいという希望もあり、今年度は初めての試みとして、定員を500名に設定させていただきました。

看護学科のオープンキャンパスでは、講堂大ホールでの学科紹介の後、看護学科学舎に移動して、高校生に看護学生の擬似体験をしていただくという「体験授業」「体験実習」の企画があり、入試や大学生活への不安や疑問にお応えしようと「なんでも相談」「先輩との交流」の企画があり、さらに将来的なことを考えていただくという「アカデミックコーナー」「附属病院見学ツアー」などがあります。大ホールでのたくさんの映像を盛り込んだ看護学生による学生生活の紹介をはじめ、すべての企画に看護学生が参加しており、高校生には大好評となっています。

各企画を紹介しますと…

「体験授業」は看護学科の教員によるミニ授業と学部生が体験した「国際交流」の報告が行われています。「体験実習」では、健康長寿体操や高齢者の体験、母子の体験、身体の音を聞く体験があります。「なんでも相談」では、入試に関すること、保健師や助産師に関すること、学生生活に関すること、大学病院に関すること、それ以外の疑問にこたえる総合案内があります。また、「先輩との交流」では看護学生および卒業生も参加し、学生の視点から来場者へのアドバイスをしています。「アカデミックコーナー」では看護学科教員の研究の紹介や大学院の紹介があります。「附属病院見学ツアー」は、今年から事前申し込み制となり、募集開始より2日目で満員となった人気企画です。附属病院看護部のご協力をいただいております。

今年は定員設定をしたこともあり。比較的、各会場にゆとりがあり、ゆっくりと体験をしていただけたのではないかと考えております。学生は数年前の自分を思い出し、教員は〇〇年前の自分を思い出し、気持ちも新たに、看護に携わることに感謝した一日となりました。

来場者は中学生から高校生、社会人と幅広く、



今後の三重県の看護を担う人々が、ひとりでも多く三重大学医学部看護学科に受験して下さることを願うばかりです。

今年も樋廻先生、看護学科育成会の支援をいただきました。西医体があるなか協力をしてくだ

さった看護学生のみなさん、忙しい勤務の間に来てくださった卒業生のみなさまをはじめ、多くの方々にご協力・ご支援をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

看護学科学生3名が平成30年度学業優秀学生学長賞を授与

平成30年5月30日（水）、環境・情報科学館1階において、人文学部、医学部看護学科及び生物資源学部を対象とした「平成30年度学業優秀学生学長賞授与式」が挙行され、看護学科からは3名の学生に学業優秀学生学長賞が授与されました。本学では、極めて優秀な学業の成果を挙げ、高い評価を受けた者で、本学の教育活動に関して他の学生の模範となるような学生に対して学長から表彰を行っています。

駒田学長、山本教育担当理事、安食人文学部長、畑下看護学科長、徳田生物資源副研究科長が列席する中、人文学部5名、医学部看護学科3名、生物資源学部11名が表彰され、駒田学長から一人一人へ表彰状と記念品が手渡されました。また、

「この賞を授与されたことをひとつのステップとしてこれからも頑張ってください」との激励がありました。

受賞された皆さん方の今後の活躍が期待されます。



(学長を囲んで記念撮影の3学生)

看護学科4年生7名に医学部長賞が授与されました

平成30年7月30日（月）、医学部長室において、看護学科4年生7名が看護学科臨地実習での学業成績優秀者として、医学部長から表彰されました。

片山医学部長から一人一人に賞状と記念品が手渡された後、畑下学科長、林教務委員会委員長とともに記念写真が撮影されました。受賞された方々の今後の活躍が期待されます。



『三重パープルリボンの活動紹介』

～“膵臓がん”に対する地域啓発活動および“膵臓がん患者さん・家族”に対する教育・支援活動：パープルリボンウォーク、パープルリボンセミナー、膵がん教室、膵がんグルメディカル教室～

肝胆膵・移植外科（三重パープルリボン事務局長） 岸和田 昌之
（三重パープルリボン実行委員長） 伊佐地 秀司

三重大学病院では、膵臓がんに対する地域啓発活動（パープルリボンウォーク、パープルリボンセミナー）、ならびに膵臓がん患者さん・家族に対する教育・支援活動（膵がん教室、膵がんグルメディカル教室）を三重パープルリボンとして全国に先駆けて行っており、紹介させていただきます。

1. 三重パープルリボン

紫色のパープルリボンは“膵臓がん”を意識したawareness ribbon（アウェアネス・リボン）です。1999年、米国において膵臓がん患者支援団体としてPancreatic Cancer Action Network（膵臓がんアクションネットワーク）が活動を開始し、本邦でも2006年に支部のパンキャンジャパンが設立されて2011年から啓発活動としての「パープルリボンウォーク（パープルストライド）」や「市民公開講座」などの活動を開始しています。三重大学病院では、肝胆膵・移植外科（旧第一外科）において膵臓がんの診療を積極的に行ってきた歴史的背景もあり、2012年7月に三重パープルリボン（委員長：肝胆膵・移植外科 伊佐地秀司 教授）を設立し「早期発見を目指して」と「専門施設での治療」を2大スローガンとして“膵臓がん”に対する地域啓発活動および膵臓がん患者さん・家族に対する教育・支援活動を開始しました。構成メンバーとしては、膵臓がん治療に関係する全ての人々で、医療従事者から学生にいたるまで多岐にわたっており、ボランティアメンバーはこの7年間で、累計900人を超えました。

2. パープルリボンウォーク

膵臓がんの啓蒙活動として、紫のTシャツを着て歩くウォークイベントが米国を発祥として始まりました。本邦では2010年5月19日に仙台にて（主催：肝胆膵外科学会）、2011年6月11日に東京（主催：パンキャンジャパン）にて開始されましたが、西日本では初めて三重パープルリボンが2012年9月9日に三重大学構内にて主催しました。当時の三重大学学長の内田淳正先生には大学構内の使用許可やテレビ局・新聞など各メディアへの周知を、当時の三重大学病院長の竹田寛先生には



パープルリボンウォーク&セミナー2018のチラシ



パープルリボンウオーク2018の参加者（集合写真）

パープルTシャツやアーチなどの資金面での積極的なサポートしていただきました。現在も三重大学病院が支援を継続していただいております。今年も7回目となるパープルリボンウオークを9月16日（日）の午前に開催することができました。なお、国内で2回以上開催しているのは、パンキャンジャパンと三重大学病院の二つだけであり、大学病院をあげて継続した強力なサポートは全国的にみても稀であり、関係者の皆様には感謝申し上げます。津医師会や日本膵臓学会からの支援も継続的にいただけるようになり、今年ががんセンター長のがんセンター中瀬一則先生の働きかけにて稲垣清文三重県副知事（鈴木英敬三重県知事代理）や前葉泰幸津市長といった行政の長にも関与していただけるようになりました。今年の参加者の合計は380人と過去最高人数を記録し、地方テレビ局や新聞社も各社報道をしていただき啓蒙活動としての意味合いも深まりました。

パープルリボンウオークの意義は、それぞれ参加者によって異なりますが、患者さんやご家族においては、医療従事者と一緒に歩くことにて、共に病気と立ち向かってどんなことにも負けない勇氣と力を感じて頂けることにあります。膵臓がんが愛する人を亡くされたご遺族の方には、愛する気持ちを忘れず、追悼の気持ちを心に抱いて歩いて頂くイベントとなり、多くの方の力の結集によって「独りではない大きなあたたかい力」を感じて頂くことができます。一般の参加者において

は膵臓がんを知っていただくきっかけになります。

当日に行われたウオークイベントの内容は、午前8時30分に受付を開始しましたが、先着200名にパープルTシャツとパープルうちわをプレゼントしました。髪飾りなど紫色のもの（サムシングパープル）を身に着けてきた方には、パープルリボンのデザインが刻印されているパープル煎餅のプレゼントがもらえます。始まるまでの時間は看護師スタッフによるフェイスペイントやボディペイントをして9時からのオープニングを待ちます。挨拶の後にラジオ体操を行い、「リボンセレモニー」を行います。リボンセレモニーとは「Know it」、「Fight it」、「End it」といった3色のリボンを使って、膵臓がんを「知って」、膵臓がんを「闘って」、膵臓がんを「撲滅する」といった膵臓がんへの思いを掲げます。写真撮影は、第1回目から弱視の写真家である小堀正一さんにより五感を使った生き生きとした360度写真と集



ウオークテープカット

（左から、野本教授、中瀬がんセンター長、稲垣三重県副知事、伊佐地教授（実行委員長）、前葉津市長、真島パンキャンジャパン理事長、患者代表、ボランティア代表）

合写真の撮影を行ってオープニングを終了します。

テープカット後に三翠ホールをスタートし、三重大学内キャンパスの各ポイントを睥臓のことを学びながらウオーラリー形式で歩き、海岸を抜けて返ってくる4kmのコースで約1時間でまわることができます。ボランティアスタッフによって手渡された飲料を飲みながら、第1チェックポイントの三翠会館（登録有形文化財）にたどり着き、昭和戦前期に建築された公共建築の特色を見学します。教育学部と生物資源学部の間を通り抜け、第2チェックポイントの環境・情報科学館（MEIPL館）では睥臓に関するクイズを行い一休みします。人文学部をこえ野球場の横を通り抜け、町屋海岸まで出ると伊勢湾の素晴らしい眺めと気持ちいい海風を横から受けることができ、中間点のフォトスポットに到着します。パープルパネルを使って記念写真を楽しんだ後は、三重大学構内へもどり、第3チェックポイントのレーモンドホール（登録有形文化財）で、紫と白のカーネーションを受けとります。医学部と工学部の間を道を通り抜けスタート地点と同じ三翠ホール前のアーチにてボランティアスタッフのシャボン玉の歓迎を受けながらゴールして、合計600本の紫と白のカーネーションでつくるパープルフラワー（パープルリボンとパープルハートMIE）を完成させ、最後に睥臓に対するメッセージを寄せ書

きに記して終了します。

このイベントの特筆すべきところは、ボランティアスタッフによって企画・運営されている点であり、4月から約15名の三重大学病院の医療スタッフおよび医学部生が中心となって取り組みを開始します。当日ボランティアの皆さんには会場設営や運営を協力していただき、今年は総勢153名が緑の下の力として協力して頂きました。職種は医師、看護師、薬剤師、栄養士など医療従事者のみならず主婦の方、学生まで多岐にわたりました。今年は学生参加が63名（中学生12名、高校生35名、大学生16名）と多く、若い世代の関心を示してもらいようになり、続けて参加してもらった中高校生が大学生になって企画・運営スタッフになり、大学生が医療スタッフへとなりパープルリボン活動を繋いでいく姿は、この活動の広がり浸透を感じ感慨深いものがありました。

3. パープルリボンセミナー

睥臓がんについて学ぶパープルリボンセミナー（市民公開講座）も2012年9月9日から年に1回開催し、伊勢医師会との合同開催と合わせると今年で8回目の開催となりました。9月16日（日）の午後に「睥臓がんの克服を目指して」をスローガンに、各分野の12人のスペシャリストに要点をコンパクトにまとめて講演をして頂きました。睥臓



左：睥臓がん教室メンバー（左から、薬剤師、医療ソーシャルワーカー、臨床心理士、看護師、栄養士、医師）
右：睥臓がん教室の様子

がんの診断、手術、抗がん剤治療、放射線治療、最新の検診方法といった専門的な情報から、かかりつけ医の役割（津市医師会）、緩和ケア、薬、栄養といった生活に密着したサポートの話まで広く網羅された講演がきくことができました。膵臓がん患者さんにも治療体験談を語っていただき聴衆の感動を誘いました。休憩をはさんで第2部はパネルディスカッションを開催し、会場からよせられた質問に対してスペシャリストの各演者に答えて頂きました。全部で3時間30分と長丁場でしたが、参加者は熱心に最後まで聴き入っていただけました。

また、三翠ホール内にはブースを設営して、講演の前後や休憩時間に参加者が膵臓に関する情報を楽しみながら学んでいただけるようにしました。三重大オリジナル商品やパンキャングッズ、三重大学病院の栄養士考案のパープルパンの販売、相談ブースとして三重パープルリボン（医師）、お薬（薬剤師）、くらし（看護師）、栄養（栄養士）、緩和ケア（緩和ケアチーム）の開設、その他にネイル、大学生によるBLS、味覚テストコーナーを設けました。フロアには膵臓に関するポスターを展示し、理解を深めていただきました。

4. 膵がん教室

当院では、2012年9月から膵臓がん患者さん・家族を対象に「膵がん教室」を教育・相談支援目的に三重大学病院の外来棟1階にある「リボンズハウス（患者支援相談室）」にて開始しました。2018年9月末で139回（24クール）を行い、のべ500人以上の皆さんに参加して頂いています。膵がん教室は2007年6月に国立がんセンター中央病院にて開始されましたが、まだ国内では20施設に満たない試みです。しかし、一人の患者さんに様々な職種の医療従事者がお互いに対等に連携し、患者中心の医療を達成しようというチーム医療の姿勢が評価され、他大学からも多数見学に来てい

第8回 科学的な手法で楽しく解説♪ 7/23 (火)
膵がんグルメディカル教室

09:30 集合
10:00 調理実習『膵ぞうがんのためのバランスの良い食事』
12:30 昼食会
13:30 実験と講義『膵ぞうの働きからみた栄養管理』
14:00 Q&A

ご家族だけの参加も歓迎♪

講師： 肝胆膵・移植外科/医師 岸和田昌之
栄養診療部/管理栄養士 原 なぎさ

場所： 外来棟 4F グルメディカルスタジオ
持物： エプロン、三角巾orバンダナ、お茶orお水

申込先： 新外来棟1階 栄養指導室
(内線：5838 外線：059-231-5496)
参加費 2160円 <完全予約制>
※自費診療、当院以外の患者様、ご家族様も受けられます。

三重大学医学部附属病院 肝胆膵・移植外科、栄養診療部

膵がんグルメディカル教室（第8回目チラシ）

ただいています。膵がん教室は、医師、薬剤師、管理栄養士、看護師、医療ソーシャルワーカー、臨床心理士の6職種が隔週で講義と対話形式にて施行しており、最終回の後には30分間の茶話会も開催しフランクに会話ができる場所も提供しております。隔週の火曜日に院内外の患者さんを問わず、無料にて開催していますので、ご興味のある方は是非お立ち寄りください。

5. 膵がんグルメディカル教室

当院では、2015年8月から膵臓がん患者さん・家族を対象に、高い栄養価と易消化性で美味しく家庭で簡単に作り置きができる治療食をコンセプトに管理栄養士が考案したレシピの調理実習と、医師による栄養講義と膵酵素消化薬実験を組み合わせた「膵がんグルメディカル教室」を、三重大学病院の外来棟4階にある「グルメディカルスタジオ（栄養指導管理室）」にて開始しました。半

年に1回のペースで行い、2018年9月末で7回を行い、現在までのべ100人以上が参加されています。膵臓がん患者さんは、膵臓の内外分泌機能低下による消化吸収障害や化学療法による経口摂取不良にて長期にわたり栄養障害をきたすため、患者さん・家族ともに継続的な栄養管理が必要ですが、この教室は自ら介入できるという本邦初の先進的な試みとして注目され、全国の施設からも多

数見学に来ていただき、東京でも2回（2017年4月、2018年2月、主催：パンキャンジャパン）出張教室を開催しています。2018年10月23日（火）にも通算10回目となる「膵臓がんグルメディカル教室」を、時短メニューを目玉として行う予定をしておりますので、興味のある方はお問合せください。

学会だより

2018年 日本ショック学会・会長賞受賞（三重大学2年連続受賞）

救急災害医学 川本英嗣

アイデアを持ち寄ることで「群衆の英知」が生まれ、個人で行う場合よりも優れた判断が行えるようになる。—James Surowiecki 『群衆の智慧』2014—

本稿では2014年に設立された三重大学バイオエンジニアリング国際教育研究センター（医学部工学部連携）において三重大学 工学部機械工学科 矢野賢一教授、高木優斗先生（筆頭著者）らと共に取り組んだ研究成果が2018年日本shock学会（医学系の学会）で会長賞を受賞しましたので、ご紹介させていただきます。

〈三重大学バイオエンジニアリング国際教育研究センターの取り組み〉

私が医工連携のプロジェクトに携わらせていただいたのはバイオエンジニアリング国際教育研究センターの設立当初からだったと思う。私の学位指導者である島岡教授（医学系研究科 分子病態学）からプロジェクトに参加してはどうかとお声

かけ頂いた。しかし当時の私はなぜ工学部と連携するのか？その意義を理解できなかった。

〈あなたは隣の医局員の研究テーマを知っていますか？〉

私の医局は三重大学救命救急センターの一階にある。12名程度の医局員がそこで机を並べている。しかし、医局員の数が少なく、また不規則な勤務形態のためお互いの勤務が重なることはほとんどない。そのため医局員同士が意見交換（コミュニケーション）する機会は希だ。そのため私はまわりの医局員がどんな研究を行っているのか？どんなことに興味があるのかについて知らない。さらに恥ずかしながら自分の不勉強とも重なり、他の医局の研究テーマに至っては想像すらできない。もっぱら私が他の医局の研究テーマを知る機会と言えば、医学生の実験発表会と毎年4月に発表される科学研究費補助金採択課題一覧にあるタイトルからである。

〈医工連携の重要性〉

James Surowiechiは「創造性は個人の才能ではなく群衆の英知である」と述べた。今回、三重大大学の医工連携の研究テーマ「渦を利用した目詰まりしない細胞分離を目的とするマイクロfluidイクスの最適設計」で医学系の学会である日本shock学会で会長賞を受賞できたのは、多様な視点をもつ研究者（医学部、工学部の先生方）が集まり相互に意見交換したから成し遂げられたものであり、まさにJames Surowiechiが示した「群衆の英知」そのものを幸運にも身をもって経験することができた。

〈研究テーマの紹介—マイクロfluidイクスで細胞外小胞を分離する—〉

私は敗血症患者の血液中に存在する細胞外小胞と呼ばれる大きさが30-1000nm程度の小さな粒子の表面に発現するタンパクを研究している。この研究分野の大きな課題の1つに分離方法の検討がある。細胞外小胞の分離には、10万G以上の超遠心を用いた分離方法が標準的であり、実験レベルでは最もよく使用されているが、大量分離・精製には向いていない。限外濾過法を使った方法も考案されているが、フィルターが目詰まりのため、スケールアップには限界がある。そのため細胞外小胞を扱う研究者にとって均一で純度の高い大量の細胞外小胞を得ることは非常に大きな課題になっている。

そこで我々は工学部矢野教授、高木先生らとミーティングを重ね、マイクロ流体デバイスにより渦を発生させて小さな粒子を分離するというマイクロfluidイクスに興味をもち、本研究に取り組んでいる。日本shock学会では渦を利用した細胞分離に関するデータを示し評価された。今後は細胞レベルからさらに小さな細胞外小胞を分離するためのデバイスを作製し、新たな細胞外小胞

の分離方法として発信していきたいと考えている。

〈集中治療室で感じること〉

私は集中治療室で他職種と連携しながら患者の治療にあたっている。たとえば、9歳の男の子が交通外傷で運ばれてきて、頭部外傷（急性硬膜下血腫）、胸部外傷（肺挫傷）、腹部外傷（肝損傷、腸管損傷）、多発骨折（骨盤骨折、下腿骨折）といった外傷部位が判明すれば、集中治療室には救急医、脳神経外科、胸部外科、IVR科、消化器外科、整形外科など多くの外科医が集まり意見交換が始まる。さらに急性期から慢性期にかけては、リハビリテーション科、栄養士、口腔ケアナースなども治療にあたり、意見交換を行う。このように集中治療室で我々は多くの困難な問題をもつ患者の治療に多職種が頭を悩ませ治療し、そして治療を成功させることができることを知っている。

1、2ヶ月後には元気に病院を退院することを理解しているのである。臨床だけではなく研究分野でもこの事はきっとあてはまるのだろう。

日本の医療従事者、病院が直面している課題は複雑で多岐に渡り、解決には多くの困難を伴う。そのため優秀な人材が全力で問題解決にあたるのだが、各人が個別に対応しても重要な問題の解決に至るのはまれである。重要なのは多くの医療従事者が意見交換して群衆の英知を結集させ、一つの課題に取り組むことなのだ。なぜ工学部と連携するのが重要なのか？その問いの答えが今回の受賞ではっきりと理解できた。



第7回臨床高血圧フォーラム 開催報告

日本高血圧学会第7回臨床高血圧フォーラム会長 伊藤 正明
事務局長 藤井 英太郎



集合写真

平成30年5月19日（土）～20日（日）の2日間、京都市勤業館“みやこめっせ”に於いて、臨床医学系講座 循環器・腎臓内科学 教授 伊藤正明会長のもと、第7回臨床高血圧フォーラムを開催しました。学会員および関係する皆様から大きなご支援を頂き、無事全プログラムを終了することができました。開催期間中の2日間は好天に恵まれ、初夏の風が清々しい「千年の都」をお楽しみ頂けたことと思っております。Pulse of Asia 2018（自治医科大学内科学講座循環器内科学部門教授 荻尾七臣会長）と同時開催させて頂き、アジア各国の高血圧研究者とも交流できました。日本高血圧学会 伊藤貞嘉理事長とアジア太平洋高血圧学会 Morgan会長とともに、「アジアの高血圧に関する京都宣言」を行いました。フォーラムにご参加、ご協力頂きました皆様に心より御礼申し上げます。フォーラム運営に当たりましては行き届かない点多々あったかと存じますが、何卒ご寛容くださいますよう、お願い申し上げます。

今回のフォーラムのテーマとしては「臓器障害抑制を目指した高血圧診療ネットワーク～豊かで健やかな高齢化社会にむけて～」を掲げました。高血圧は罹患率が最も高い生活習慣病であるため、

心血管疾患を予防する上にも高血圧に対する予防、診断と治療の向上は極めて重要であり、健康で長寿の社会の実現に向け、より良い高血圧診療を進めるには、各診療科間のネットワーク、職種間のネットワーク、さらには病院から在宅診療に至る地域のネットワークを深めることが重要と考えられます。今回の臨床高血圧フォーラムでは、このようなネットワークをさらに深められる場と位置づけ、保健師・看護師・薬剤師・生理検査技師・理学療法士・栄養士などのメディカルスタッフの方々にも興味を持って頂けるセッションをプログラムに多数盛り込みました。



アジアの高血圧に関する京都宣言

特別講演1題、会長特別企画4セッション32題、シンポジウム9セッション36題、メディカルスタッフセッション3セッション13題、教育講演8題、一般演題108題の応募をいただき、最新の hypertension 学に関する多彩で優れた成果のご発表を頂きました。登録参加者は976名にのぼり、Pulse of Asia 2018の登録参加者166名と合わせて、1,142名のご参加をいただきました。連日各会場では若手の研究者、医師、メディカルスタッフを含めた熱い議論が交わされました。

交流会では、三重県食材をふんだんに使った「松坂牛のローストビーフ」、「伊勢エビ&アワビ

のお造り」、「伊勢エビの具足煮」、「伊勢うどん」、「四日市トンテキ」等でおもてなしが出来ました。また2日目のランチョンセミナーでは、三重県立相可高等学校食物調理科 村林新吾先生にご尽力いただき、高校生レストラン「まごの店」から減塩弁当をお届けいただきました。

このように盛会のうちに終了出来ましたのも会員各位、ご参集頂いた皆様、座長及び演者の先生方のご協力の賜物と心より感謝しております。

末筆ではございますが、皆様の益々のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



伊藤会長(右)と藤井事務局長(左)



よしおくん、うすあ人と伊藤会長

「第3回小児がん診療体制における東海北陸ブロック

多職種連携研修会in 金沢 (石川県・富山県・福井県)」

小児科学 岩本 彰太郎

本研修会は、東海北陸ブロック内に存在する2つの小児がん拠点病院(名古屋大学病院および三重大学病院;代表 平山雅浩)が主催する形で、北陸地区内で小児がん診療を実施している病院を対象に、平成28年度から年1回、アウトリーチ型研修会として開催している。研修内容は、基調講演及びランチョンセミナーによる座学講演と、事例検討を基にテーマ毎に多施設・多職種によるグ

ループワークを実施している。

今年は6月30日、金沢市において、「第3回小児がん診療体制における東海北陸ブロック多職種連携研修会 in 金沢(石川県・富山県・福井県)」を開催した。

参加者は、当院スタッフ19名を加え合計65名で、その内訳は表のように、9施設 10職種と、まさに多職種連携研修会となった。

【参加者内訳】

施設名	参加者	職種別内訳									
		医師	看護師	SW	心理	保育	教員	相談員	薬剤師	CL S	事務
石川県立中央病院	4	1		2	1						
金沢医科大学病院	8	2	2	3	1						
金沢大学附属病院	12	3	8	1							
公立小松大学	1						1				
富山大学附属病院	10	3	4	1	1	1					
福井県立福井東特別支援学校	3						3				
福井大学医学部附属病院	4	2	1	1							
名古屋大学医学部附属病院	4		2	1				1			
三重大学医学部附属病院	19	5	4	2	1				2	2	3
計	65	16	21	11	4	1	4	1	2	2	3

研修内容としては、基調講演では、当院高度生殖医療センター前沢忠志先生を講師にお招きし、小児がん診療に関わるトピックスである“妊孕性温存”について、「将来パパやママになるためには！～今知っておきたい治療法～」という演題でご講演頂いた。その中で、女兒については、思春期前であれば卵巣組織凍結、思春期以降なら未授精卵子凍結保存が、男児については、基本思春期以降を対象として精子凍結保存が選択されるものの、思春期前の方法は未確立であることを、丁寧に分かりやすくご説明頂いた。

小児がん診断後、治療開始までのわずかな時間のなかで、子どもとその保護者に妊孕性温存についてお話をし、その希望にそって処置する時間を確保することは、臨床現場にておいて非常に厳しい。しかし小児がん患者の7割以上が長期生存できる現在、妊孕性温存の意思決定は、患者にとって重要な権利であり、小児故の様々な配慮をしつつ、その権利を保障していくことが大切であると再認識できた。

次に、ランチョンセミナーでは、当院口腔ケアセンター奥村健哉先生にお願いし、「小児がん治療のための口腔管理」という演題でご講演頂いた。がん治療に関連した口腔領域の急性期及び長期

フォローアップ時の合併症とその対処を、多くの写真や図を用いて解説された。両講演ともに、参加者から活発な質問があり、有意義な議論ができた。

また、事例検討においては、テーマを「長期フォローアップ」と「終末期を含む緩和ケア」に設定したところ、各施設から3演題の貴重な事例提示があった。特に、「終末期を含む緩和ケア」においては、再発を繰り返し、ターミナル期を迎えた青年期の患者の、地元病院への転院に向けた多職種連携支援について深く議論された。当院緩和ケアセンター松原貴子医師に司会をして頂いたことで、関わったスタッフの思いを上手に引き出され、参加者が皆心打たれながら、共感し合えた貴重な時間となった。

研修会終了後のアンケート結果では、期待通りの研修会であったという方が95%、プログラム内容への評価も“満足”するが100%と非常に好評であった。一方で、議論を含め時間不足の指摘が多く、それだけ内容のある講演や事例検討会であったことが伺えた。

小児がん拠点病院は、平成30年度現在、全国7ブロック内に15病院存在する。地域における小児がん医療及び支援を提供する中心施設として地域

全体の小児がん医療および支援の質の向上に資するなどの整備に関する指針の要件を満たし、厚生労働大臣が指定した病院である。当院は、東海北陸ブロック内の拠点病院の一つとして、同ブロック内の小児がん診療の質の向上に貢献すべく、本研修会を3年にわたり実施してきた。今回も、当院から多職種のスタッフに関わっていただき、北陸の施設の方々と活発な意見交換ができた。会を

重ねる度に、ブロック内病院間の距離が縮まっていくとともに、当院スタッフの小児がん診療のモチベーションが上がってきていることを肌で感じる。

本年度、厚生労働省は小児がん拠点病院の見直しを計画しており、当院が再指定されれば、来年度も北陸地区で本研修会を開催したい。

第25回日本遺伝子診療学会大会を開催して

中央検査部 中 谷 中

平成30年7月12日～14日、伊勢市で、「遺伝子診療の明日への架け橋」をテーマに、第25回日本遺伝子診療学会大会を開催させていただきました。日本遺伝子診療学会は遺伝関連学会の中でも、「遺伝子関連技術の臨床応用に関する研究の推進と向上をはかること」という会則があることからわかりますように、遺伝医療をソフト、ハードの両面から支える学会であり、遺伝医療やがん診療に従事する医療者だけでなく、技術開発を携わる研究者、企業等幅広い会員に全国からお集まりいただきました。

教育講演では、我が国のがんゲノム医療の牽引者である近畿大学医学部西尾和人教授に「臨床検査におけるがんクリニカルシーケンス」と題した



近畿大学医学部 西尾和人 教授



パネルディスカッション

ご講演をいただき、我が国の現状と展望を解説していただきました。

会長シンポジウムでは、井村屋株式会社の伊藤宏規様に「井村屋の特色経営とは」というお話を伺い、我々が地方から全国に発信する術のヒン



井村屋株式会社 伊藤宏規 様

トをいただきました。会場では冷たい「あずきバー」を振る舞い、食べながらの拝聴となりましたが、心を熱くするご講演でした。その他、がんゲノム医療、医療法改正に基づく遺伝子関連検査の精度保証、診断技術の開発、希少疾患の遺伝医療といった最新的话题を取り上げたシンポジウムや多くの一般演題により熱気に満ちた会となりました。

がんゲノム医療シンポジウム中には「赤福」をお召し上がりいただいたり、参加者の中には会場近くの伊勢神宮を参拝されたり、最終日に重なった宮川の花火を見物された方もみえ、学会とともに三重を堪能して帰られたことと思います。

大会運営に関して学内外の多くの先生方にお手伝いいただきましたことを、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

日本衛生学会学会賞2018を受賞して

環境分子医学 村田 真理子



日本衛生学会は、日本医学会の一部会「衛生学・細菌学・伝染病学」として、明治35年に始まり、昭和4年の日本聯合衛生学会を第1回と規定し、昭和24年に現在の名称となり、昨年度の学術総会で第88回を迎えています。2018年3月に開催されました第88回日本衛生学会総会において「炎症関連発がん機構の解明とその予防」の研究に対して日本衛生学会学会賞をいただくことができました。写真は賞状と楯で、楯に描かれているのは「健康の女神ヒュギエイア (Hygieia)」です。ちなみに、Hygieiaは英語のhygiene (衛生) の語源といわれています。

感染症および慢性炎症は発がん要因の約25%を占めると推定されており、炎症関連発がん機構の

解明に我々は10年以上にわたり取り組んできました。炎症関連発がんにおいては、慢性炎症条件下で炎症細胞および上皮細胞より産生される活性酸素/窒素種によるDNA損傷が重要であり、その変異誘発性DNA損傷である8-オキシデオキシグアノシンや8-ニトログアニンが共通の発がん分子機構として重要であることを多数報告してきました。また、活性酸素や炎症性サイトカイン (IL-6、等) がDNAメチル化に関わる酵素の発現やmicroRNA異常に影響するとの報告があり、炎症とエピゲノム異常との関係が明らかになってきています。炎症関連がんとして、我々はEpstein-Barrウイルス感染上咽頭痛や頭頸部癌でのがん抑制遺伝子のDNAメチル化やmicroRNA発現異常の発がんにおける役割を明らかにし、バイオマーカーとしての可能性を示してきました。

この受賞を励みとして、今後、より精度の高いバイオマーカーを開発し、がん予防対策に発展させていきたいと存じます。これまでに研究の遂行にあたり、多くの方々にご尽力、ご支援を賜りました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

Congenital Anomalies Awardを受賞して

統合薬理学 西村有平

この度、第58回日本先天異常学会学術集会においてCongenital Anomalies Awardを受賞いたしましたので、謹んでご報告申し上げます。本賞は、日本先天異常学会英文機関誌であるCongenital Anomaliesに投稿された論文の中で、被引用回数が多くimpact factorの向上に寄与した論文に対して授与される賞として最近制定されました。第一回目のCongenital Anomalies Awardとして、私が筆頭著者として投稿いたしました“Zebrafish as a systems toxicology model for developmental neurotoxicity testing”というタイトルの総説を選出していただきました。本年7月の学術集会において、立派な盾と賞状、賞金を授与していただいただけでなく、講演の機会も与えていただきました。講演では、私が発達神経毒性を研究するに至った経緯や、ゼブラフィッシュ

を用いる理由、この総説が完成するまでに鍵となった出来事、ご指導いただいた先生方への感謝、今後の研究の方向性などについて発表させていただきました。このような素晴らしい賞を与えていただきました日本先天異常学会の皆様にご心より感謝申し上げます。

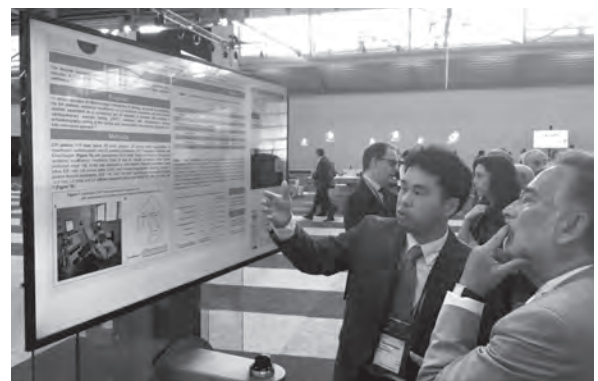
世の中はどんどん便利になっていきますが、それに伴い日常生活の中で私たちが曝露される化学物質も多種多様になっていきます。これらの化学物質が子どもの脳の発達にどのような影響を与えるのかに関しては不明な点も多く、多面的な研究が必要とされています。様々な観点から化学物質の発達神経毒性を研究し、安心・安全な社会の構築に少しでも貢献できるよう精一杯努力してまいりたいと存じます。今後とも御指導御鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

European Society of Cardiology(ESC)Congress 2018 :

Best Posterを受賞して

循環器内科 杉本匡史

2018年のESC (European Society of Cardiology : 欧州心臓病学会) Congressは8月25日から29日の5日間、ドイツのミュンヘンで開催され、世界150か国から33,000人の参加者が集まり4,500の演題が発表されました。私は2015年3月から12月までの間、イタリアのミラノ大学で心肺運動負荷試験と運動負荷心エコーの同時測定を研究テーマとして留学しておりました。また、2016年2月から2017年10月までの間、ベルギーのリエージュ大学



Best posterの発表

で弁膜症に対する運動負荷心エコーをテーマとして留学し、2017年11月より三重大学医学部附属病院の中央検査部助教に着任いたしました。ミラノ大学との関係は現在も継続しており、今回のESC Congressでは心肺運動負荷試験と運動負荷心エコーの同時測定に関する演題でBest Posterを受賞することができました。

通常、心肺運動負荷試験と運動負荷心エコーは別々に行われますが、循環器疾患において両検査で用いられる指標には同じ病態生理を背景に持つものが多く、両者を同時に測定することで循環器

疾患患者の運動時病態生理をより深く理解することができます。今回の発表では左心系疾患において運動時換気障害の指標であるVE/VCO₂ slopeを予測する心エコー指標として左房機能、特にリザーバー機能やステイッフネスといった指標が旧来の指標に比べて有用であるという内容を発表し、左心系疾患の運動時における左房機能の重要性を明らかにしました。海外の研究者からも沢山の意見や質問を頂くことができ、今後の研究発展に大きく貢献する受賞となりました。引き続き、論文文化に向けて精進して参ります。

第39回日本心血管インターベンション治療学会東海北陸地方会 Young Investigator Award を受賞して

循環器・腎臓内科学 石浦 純子

この度、2018年5月11日-12日にウインクあいちで開催されました第39回日本心血管インターベンション治療学会東海北陸地方会にてYoung Investigator Award (臨床研究部門) を受賞させて頂きました。受賞演題は「心筋梗塞後再発性心室中隔穿孔に対し、Amplatzer duct occluder による閉鎖術を施行した1例」です。

心室中隔穿孔は0.2-0.3%の頻度で発症する急性心筋梗塞の機械的合併症です。稀ですが、その死亡率は心原性ショックを伴う場合、1ヶ月で85%以上であり非常に予後不良です。心室中隔穿孔合併例は、これまで早期の外科手術が第一選択とされておりましたが、心筋梗塞急性期の心筋は非常に脆弱であり、再発率は5-20%程度とされております。

本症例も初回手術後に心室中隔穿孔の再発をきたし、人工呼吸器管理・補助循環装置を併用しながら組織の安定化を待ったのちに再手術を検討しましたが、組織が高度に癒着しており、再手術が

完遂できませんでした。救命は困難かと思われていた本症例に光明を与えてくれたのが、経皮的心室中隔穿孔閉鎖術でした。経皮的心室中隔穿孔は、より低侵襲で外科的手術とも治療成績は大差のないことが近年報告されております。適応外使用となるため、当院倫理委員会の承認を得て、国内では本治療の第一人者である仙台厚生病院の多田憲生先生をお招きして、無事に心室中隔穿孔閉鎖を施行することができました。患者様は、その後人工呼吸器・補助循環装置も離脱され、リハビリテーション目的に転院を迎えることができ、このことは診療に携わらせて頂きました私達にとりまして大変喜ばしいことでした。

本症例の診療に際しまして仙台厚生病院の多田憲生先生、当院心臓血管外科、小児科、麻酔科の先生方には多大なご尽力を賜りました。この場をお借りしまして、心より感謝申し上げます。今回の受賞を励みに引き続き日々の診療に精進していく所存でございます。今後ともご指導・ご鞭撻

のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

第90回日本超音波医学会 奨励賞を受賞して

臨床研究開発センター 三好 剛一

受賞演題

小動物用超音波イメージングシステムを用いた胎児心不全モデルマウスの探索

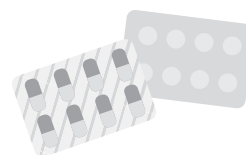
受賞コメント

2017年5月26日から28日まで宇都宮で開催された第90回日本超音波医学会において奨励賞を受賞しました。本研究では、小動物用超音波イメージングシステムをマウス胎仔に応用することにより、従来の組織標本では困難であった胎仔心機能および胎盤循環動態をリアルタイムに評価できる実験系を確立しました。薬剤誘導や遺伝子改変によって先天的に心形態異常を呈するマウスの多くが胎

生早期に致死となり経時的な観察が困難であることから、適切なモデルマウスを見つけ出すのに非常に苦勞しました。その中で、*Hey2*欠損マウスは出生するまでの間、形態異常および心不全が進行する経過を観察することが可能であり、その研究成果を報告しました。この受賞を励みとし、胎児心不全の病態解明および新規治療法開発を目指して、引き続き研究に精進したいと思います。本研究を進めるにあたりご指導・ご協力賜りました国立循環器病研究センター再生医療部の細田洋司先生、分子生理部の中川修先生、渡邊裕介先生、久光隆先生にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



小動物用高解像度超音波イメージングシステム



第24回日本胎児心臓病学会 里見賞「研究部門」を受賞して

臨床研究開発センター 三好剛一

受賞演題

胎児心疾患モデルマウスを用いた胎仔心不全治療法の開発

受賞コメント



2018年2月16日から17日まで埼玉で開催された第24回日本胎児心臓病学会において里見賞「研究部門」を受賞しました。本研究では、小動物用超音波イメージングシステムにより独自に開発した評価系を胎児心疾患モデルマウスに応用することにより、PDE5阻害剤による胎仔心機能の改善効果を明らかにしました。PDE5阻害剤は小児・成人領域では肺高血

圧症の治療薬として一般的に使われていますが、心収縮能の改善効果もあることが知られていました。今回、PDE5阻害剤を経母体的に投与することにより、*Hey2*欠損マウスにおいて胎仔心収縮能の改善効果が確認されたので、その研究成果を報告しました。この受賞を励みとし、胎児心不全治療の臨床応用を目指して、引き続き研究に精進したいと思います。本研究を進めるにあたりご指導・ご協力賜りました国立循環器病研究センター再生医療部の細田洋司先生、分子生理部の中川修先生、渡邊裕介先生、久光隆先生にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



国立循環器病研究センター 再生医療部

第70回日本産科婦人科学会

JSOG Congress Encouragement Awardを受賞して

臨床研究開発センター 三好剛一

受賞演題

Antenatal anti-arrhythmic treatment for fetal tachyarrhythmias : a prospective multicenter trial in Japan

受賞コメント

2018年5月11日から13日まで仙台で開催された第70回日本産科婦人科学会においてJSOG Congress Encouragement Awardを受賞しました。本臨床試験は、胎児頻脈性不整脈に対する経胎盤

的治療としては世界で初めての多施設共同の介入試験であり、プロトコル治療の有効性と安全性を示しました。胎児頻脈性不整脈は稀少疾患であり、約6年間かけて集積した50症例の解析結果を、研究事務局責任者の立場から報告させていただきました。この受賞を励みとし、胎児頻脈性不整脈に対する標準治療プロトコルの確立を目指して、引き続き精進したいと思います。本臨床試験を先

進医療Bで実施するにあたり、研究代表者である国立成育医療研究センター胎児診療科の左合治彦先生、三重大学産婦人科の池田智明先生、久留米大学小児科の前野泰樹先生および研究協力施設の先生方、国立循環器病研究センター治験推進部の山本晴子先生、さらには症例登録にご協力いただいた全国の先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



胎児頻脈性不整脈臨床試験ポスター

日本先天異常学会奨励賞を受賞して

発生再生医学 江 藤 みちる

2018年7月28日に東京で開催されました第58回日本先天異常学会学術集会におきまして、日本先天異常学会奨励賞を受賞しました。これは、「Mechanism of auditory hypersensitivity in human autism using autism model rats」(Pediatrics Internationalに発表)(邦訳 ヒト自閉症に併発する聴覚過敏の機序解明と自閉症の新たな診断方法：自閉症モデルラットを用いた解析)が評価されたものです。

私は自閉症にしばしば併発する聴覚過敏に興味



(写真) 表彰式にて、理事長の大谷浩先生(右端)、選考委員長の黒澤健司先生(左端)、他の受賞者とともに。中央が筆者。

をもち、その原因について知りたいと思い、自閉症モデルラットを用いて研究に取り組んでまいりました。この成果が、このたびの受賞に至りました。

たことは本当に嬉しく思います。今後もこの分野でしっかりと研究を続けたいと思います。

第27回日本臨床環境医学会学術集会を開催して

看護学専攻基盤看護学領域実践基礎看護学分野 今井奈妙

平成30年7月7-8日、三重大学環境・情報科学館において、第27回日本臨床環境医学会学術集会を開催しましたので報告致します。

日本臨床環境医学会は、1992年に環境と疾患に関する研究の発展を促進し、疾患予防と治療に努めるために設立された学会です。中毒、アレルギー、内分泌、自律神経など、環境問題と臨床医学の接点を主題として毎年学術集会を開催していますが、三重県での開催は初めてであり、女性（看護職）が大会長を務めたのも初めてでした。

今大会のテーマは「トータルヘルス社会の実現に向けて」でした。トータルヘルス社会とは、人にとってあるべき健康を目指した、疾病の治療や予防に留まらない包括的なヘルスケアシステムの構築された社会を表しています。誤解を恐れずに表現するならば、それは、「生活することで健康になれる社会」です。よって、今大会では、参加者がその片鱗を感じられるよう、参加するだけで健康になっていける努力をしました。

まず、会場からワープロ文字を排除し、演題タイトル他全ての文字を書家による毛筆書きとしました。これは、毛筆書きに人の想いを載せることが出来ると考えたからであり、口演タイトルの案内も手作りのめくり台を使用して行いました。さらに、時間制限を知らせるベルには、シンギングボウルを用いました。シンギングボウルは音治療

等で用いられ、澄んだ音色を特徴としています。口演会場で繰り返し否応なく耳に入る時間制限のベル音が研究者への治療（癒し）になる必要があると考えました。

次に、学術集会プログラムの組み立ては、神羅万象に見られるヘリックス（螺旋構造）を意識し、軸が通って向上するイメージを取り入れました。具体的には、国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第七部部長本田学氏による特別講演（オープニング）、富山大学医学部公衆衛生学講座准教授浜崎景氏による教育講演①、東海大学医学部長・基礎医学系生体構造機能学領域教授坂部貢氏による基調講演、東京大学分子細胞生物学研究所免疫・感染制御研究分野教授新蔵礼子氏による教育講演②（エンディング）を組み、その間に、40題の研究発表と現代の大きな健康テーマである電磁波による環境病および高齢者住宅に関する2つのシンポジウム（講演8演題）を組み込みました。

また、硬いイメージの研究発表に対して、順天堂大学医療看護学研究科地域看護学分野教授櫻井しのぶ氏（三重大学名誉教授）、三重大学大学院工学研究科分子素材専攻教授金子聡氏、トータルヘルス研究所（津市河辺町）所長落合正浩氏らによる笑いの絶えない市民公開シンポジウムを開催しました。さらに、講演後には、米国在住のジャズ・ハープ奏者・古佐小基史氏による演奏会に加えてアロマセラピーを希望者に行いました。

2日間に渡って、情報・環境科学館1階が研究者らによる討論の場であるならば、一方、会場3階を全国の環境病患者の「声」(現状)を展示する場としました。加えて、良好な睡眠、周波数による身体調整、過疎地の茶実を使った油精製(環境病患者による町興し)、健康住宅素材等の企業展示を行いました。また、地元菓子店舗からの支援を受け、全国からの参加者に三重県の味を楽しんでもらい産学連携の契機となるようにしました。さらに、今大会では、全ての食事に完全オーガニック素材を取り入れました。日本環境医学会の学術集会が、完全オーガニック素材のグレイニズムの食事を提供したのは初めてでしたが、これは、ダイエットや生活習慣病予防といった個としての健康追求はもちろんのこと、環境保全のために、日本人として何を食べるべきかを考えていたできたかったからです。

このように、学術集会全体(時空間と内容)に

「対」のバランスを持たせる工夫をして、参加者(一般会員69名、学生会員5名、非会員45名、学部学生30名、計149名)から満足の感想を得ることが出来ました。学術集会当日は、西日本が激しい雨天となり、後に、「西日本豪雨災害」と名付けられた日でした。しかし、津市上空は、7日朝に薄曇りから徐々に雨へ、集中豪雨の夜が明けて8日朝には晴天となり、まさに、天候までが自然のバランスを教えてくれたかのようにでした。ご支援いただきました皆様に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。



5th International Moyamoya Meeting best poster awardを受賞して

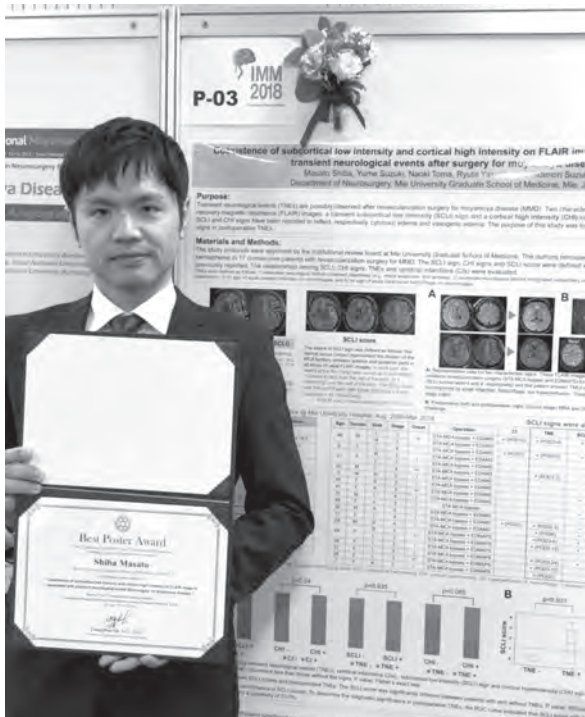
脳神経外科 芝 真人



平成14年卒の芝 真人と申します。今回、韓国ソウルで行われた5th International Moyamoya Meeting(国際もやもや病会議, IMM)において

best poster awardを受賞しましたので寄稿させていただきます。

もやもや病は厚生労働省の指定難病の一つであり、あるミュージシャンが罹患したことでも有名になりましたが、10万人対3-10人と頻度の少ない疾患です。国際的にもMoyamoya diseaseと呼ばれていることから分かるように日本人によって報告され、世界的にみても日本人の患者数が多いことで知られております。ただ世界的には希少疾患であるためこのような会議で各国それぞれの施設の診療・研究を共有しようというのがIMM発足の主旨です。今回もやはり日本の施設からの発



表が半分程度占めており、本疾患においては日本の役割が大きいことがよく分かります。

個人的にももやもや病は思い入れの強い疾患であり、現在当院において治療の担当をさせて頂いていることに深謝しております。自分がまだ6-7年目の頃に初めて執刀したもやもや病患者さんがいて、手術自体は非常にうまくいき、術後の患者さんの状態も良かったのですが、術後数日経過してから急に喋れなくなってしまいました。この現象は一過性神経脱落症状(TNE)といってもやもや病術後には比較的よく認められる兆候で、ほとんどの場合は元の状態に回復するものなのですが、当時は知識もなく、もやもや病について今よりも解明されていなかった時代ですので、様々な検査を

したり、効果がありそうな薬物を調べて投与したりして、最近そのような医師を見かけることがなくなりましたが、いわゆる「寝ずの番」をしました。結局原因はよく分からなかったのですが（今でもTNEの原因は分かっていません）、患者さんは徐々に喋れるようになり、最終的には歩いて退院され、安堵したことを覚えています。今は術後にこういうことが起こっても、若い先生たちに「やるべき治療をして待っていればよくなるよ」と余裕をもって教えることができます。

今回IMMで発表したのは、このTNEとMRI FLAIR画像の特徴的所見についての検討です。TNEを起こす患者はFLAIRで脳皮質及び白質に可逆的な異常信号を呈することが多いということ論文化しました（Clin Neurol Neurosurg 167, 2018）。その内容に沿ってIMMで発表し、おそらくその新規性を認めてもらったのだと思いますが、今回の受賞に至りました。ご指導いただきました鈴木秀謙教授、当麻直樹先生をはじめ、当科の血管グループの先生方に感謝申し上げます。



第13回日本小児耳鼻咽喉科学会で会長賞を受賞して

耳鼻咽喉・頭頸部外科 竹内万彦

日本小児耳鼻咽喉科学会は、それまでの研究会から2006年に学会に昇格してから12年と比較的

だ新しい学会です。この学会は耳鼻咽喉科医と小児科医との学際的な学会ですが、その会員の多く

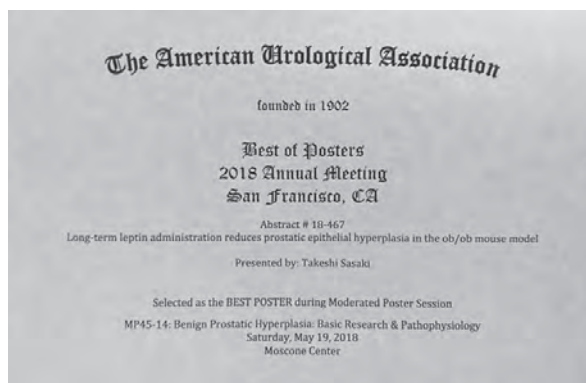
は耳鼻咽喉科医であり、今後小児科医の積極的な参画が不可欠なところです。

第13回の学会は東海大学医学部 小児科の望月博之教授を会長として、平成30年7月12日、13日に、ワークピア横浜（横浜市）で開催されました。私が一般演題として応募した「遺伝子パネルによる原発性線毛運動不全症の遺伝子変異の解析」は、金曜日の朝一番の「会長推薦講演」の群に分類されていました。学会場に到着してから、会員懇親会に必ず出てくださいと頼まれて、行ってみると、私を含めて「会長推薦講演」の群で発表する3名が会長賞として表彰していただきました。壇上で

賞状と横浜のお菓子をいただきました。あと2題は北里大学耳鼻咽喉科 波多野瑛太先生の「当科における小児咽頭外傷69例の検討」と富山大学小児科 伊藤靖典先生の「気管支喘息児におけるスギ花粉症が呼気一酸化窒素に与える影響」でした。今回の会長のご専門が小児呼吸器学、小児アレルギー学であったということもあり、受賞に至ったのだと思います。この発表ができたのは、当院の中央検査部、遺伝子検査室の池尻 誠さんと中央検査部教授の中谷 中先生のおかげです。この場を借りてお礼させていただきます。

第113回アメリカ泌尿器科学会 ベストポスター賞を受賞して

腎泌尿器外科 佐々木 豪



この度、平成30年5月18日～22日、米国サンフランシスコで開催されたアメリカ泌尿器科学会（American Urological Association 2018 annual meeting：AUA 2018）の前立腺肥大症基礎研究部門で、ベストポスター賞を受賞させて頂くことができました。本学会は、100か国以上から16,000人以上が参加者する泌尿器科学分野において世界最大規模の国際学会です。

受賞した演題は、「Long-term leptin administration reduces prostatic epithelial hyperplasia in the ob/ob mouse model」です。今回の発表内容は、

遺伝性肥満ob/obマウスを用いた動物実験モデルで、前立腺肥大症の発病・進行のメカニズムの解明を試みた研究です。前立腺肥大症は下部尿路症状の一因であり、日本人男性における推定患者数は55歳以上の5人に1人とされ、有病率や治療費の観点から重要な疾患です。しかし、前立腺肥大症の発病・進行のメカニズムの詳細は明らかになっていません。前立腺肥大症の明らかな危険因子は加齢とアンドロゲンですが、大規模な疫学研究から肥満を含むメタボリック症候群が病勢進行および治療抵抗性に関与している可能性が示されています。われわれの動物実験モデルで、インターフェロンシグナル、ケモカイン（CCL6）、IGF結合蛋白-3が、肥満と前立腺上皮過形成に重要な因子である可能性が示されました。また動物実験モデルで得られた各因子は、ヒト前立腺肥大症組織におけるそれらの発現量と、肥満（BMI）指数に正の相関が見られることが示されました。これら一連の研究から前立腺肥大症の新

規治療、さらには予防に繋がる可能性が期待されます。

このような賞を頂けたのは、周りの方々のご協力あっての事です。腎泌尿器外科学講座の杉村

芳樹教授、米国シカゴ大学ノースショア・ユニバーシティ・ヘルスシステム研究所のSimon W. Hayward教授ほか、お世話になりました方々にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

前立腺生物学シンポジウム伊勢志摩2018

腎泌尿器外科学 加藤 学



この度2018年7月12日（木曜日）～13日（金曜日）に三重県鳥羽市鳥羽国際ホテルにて、三重大学医学部附属病院腎泌尿器外科学教室主催の「前立腺生物学シンポジウム伊勢志摩2018」が開催されました。本シンポジウムは、腎泌尿器外科杉村芳樹教授と腫瘍病理学白石泰三名誉教授が世話人となり、2002年から始まり、4年に1回開催され、今回で第5回を迎えた伝統のあるシンポジウムです。通常の学会でみられるような製薬会社等のバックアップは一切無く、ハンドメイドのクロウズな基礎医学研究会です。今回のプログラムは、2日間にわたり、4つの特別講演、7つの指定演者によるセッションと一般演題ポスターセッションにより構成され、全国から約30名の前立腺基礎研究者に御参加頂きました。

特別講演としては、初日坂倉照好先生（病理学名誉教授）から「頑張れ生物学！」という題名として講演頂き、研究者として持つべき姿勢を示し

て頂き、参加者全員が感動しました。また、腫瘍病理学講座の石井先生からは前立腺癌診療におけるドラッグリポジショニングに関する御講演を頂き、さらに同腫瘍病理学講座教授渡邊昌俊先生から、検査、診断、治療と多岐にわたり無限の可能性を秘めたナノテクノロジーを応用した研究に関する分かりやすい御講演をして頂きました。また、三重大学看護学専攻広域看護学領域ストレス健康科学分野の小森照久教授から「熊野古道伊勢路はええなあ（いいね）、おいな（いらっしゃい）」というタイトルにて、伊勢志摩からさらに南に位置する熊野古道について詳しい解説をして頂きました。

指定演者セッションでは、前立腺肥大症の病態生理解明、前立腺癌の病態生理、前立腺癌の遺伝子研究、前立腺癌の微小環境、前立腺癌の内分泌環境、前立腺癌のアミノ酸脂質代謝、前立腺癌の診断の探索等の内容で、全国から各大学の新進気鋭の中堅・若手の研究者に熱のこもった御発表を頂き、熱のこもった質疑応答がなされました。

研究会初日には、鳥羽水族館にてウェルカムレセプションが開催され、鳥羽水族館副館長である若井嘉人さんからジュゴンにまつわる興味深い御講演があり、館内が無料開放され参加者にとっては非日常の楽しい時間を持つことができ、日頃臨床と研究に多忙な参加者にとって大変好評でした。

このように「前立腺生物学シンポジウム伊勢志

摩2018」は、無事盛会のうちに終了することができました。4年に一度のシンポジウムを5回におよび開催できたという功績を皆で共有できる素晴らしいシンポジウムとなりました。4年後の2022年に、第6回のシンポジウムが開催されるかどうか分かりませんが、今回のシンポジウムで得られ

た前立腺基礎研究に対するモチベーションを元に三重大学腎泌尿器外科学教室は日々の臨床と研究活動に邁進して参りますので、今後ともどうか宜しく御願ひ申し上げます。

文責；腎泌尿器外科学 加藤 学、杉村芳樹

第一回 日本肝胆膵外科学会 東海地区地域教育セミナーを開催して

肝胆膵・移植外科 准教授 水野修吾

平成30年8月4日(土)、第一回 日本肝胆膵外科学会 東海地区地域教育セミナーを開催させて頂きましたのでご報告させていただきます。

日本肝胆膵外科学会では、2011年より肝臓癌、膵臓癌、肝移植などの高難度肝胆膵外科手術をより安全かつ確実に行うことができる外科医師「肝胆膵外科高度技能専門医」を認定しております。厳正な書類・ビデオ審査が行われ、合格率は毎年60%前後の狭き門です。三重大学肝胆膵・移植外科では、伊佐地秀司教授ご指導の下、2013年に私が三重県下で初めて取得させて頂き、以後、岸和田昌之先生、大澤一郎先生、安積良紀先生、栗山直久先生、種村彰洋先生、村田泰洋先生の合計7名の専門医を輩出しております。私が取得しました時は、高度技能専門医は全国で61名のみでしたが、現在では250名を超え、全国各地で活躍をされていますが、技術の伝承すなわち、若手外科医への教育・指導方法についても注目されるようになってきました。

このような状況下で、2015年に、今後の肝胆膵外科学会高度技能専門医の在り方を検討するため、全国から選抜された14名の専門医からなる高度技能専門医ワーキンググループが結成されました。私もそのメンバーの一人に加えて頂きましたが、その活動の一環として、学会ではなかなか行えな

い、手術手技に特化し手術ビデオを元に議論するセミナーを各地域で行うこととなりました。東海地区では伊佐地秀司教授と名古屋大学水野隆史先生が地域教育セミナー委員、私が実務委員として会を運営することになり、2017年9月から準備を進めて参りました。

セミナー会場は、東海地区の先生が集まりやすい場所ということで、名古屋大学医学部講義棟をお借りしました。内容は、かなり専門的ではありますが、肝切除は「肝切除肝門部操作について(グリソン一括処理 vs. 個別処理法)」、膵切除は、「膵頭十二指腸切除における肝十二指腸間膜郭清(下部胆管癌 vs. 膵頭部癌)」の二つのテーマを主に、東海地区の高度技能専門医にビデオを供覧していただき、手術手技を検討することとなりました。当日は、最高気温35度を超える猛暑日となりましたが、肝胆膵外科学会高度技能専門医を目指す、或いは肝胆膵外科高難度手術手技に関する技術の向上を目指す126名の外科医が、東海地区以外からも参加頂きました。活発なディスカッションが行われましたが、予定時間内に終了することが出来、終了時のアンケートの結果では、殆どの先生方に満足して頂き、盛会の裡に終えることが出来ました。今後同セミナーは毎年開催される予定ですので、今回の経験を踏まえて、肝胆膵

外科の魅力とその技術の伝承に尽力できればと考えております。最後になりましたが、この場をお借りして、会の運営にご協力頂きました、伊佐地

秀司教授はじめ肝胆膵・移植外科の先生方に御礼を申し上げます。

「日本臨床腫瘍薬学会学術大会2018初心者優秀ポスター演題賞を受賞して」

薬剤部 赤 阪 未 来

この度、2018年3月17日から18日にパシフィコ横浜で開催されました、日本臨床腫瘍薬学会学術大会2018におきまして、初心者優秀ポスター演題賞を受賞させて頂きましたのでご報告いたします。

今回、「若年がん患者の妊孕性低下に対する医療従事者のアンケート調査：生殖医療医による講演前後における薬剤師の意識変化」という演題で発表しました。近年、がん全般の治療成績の向上とともに、がんサバイバーが増加しています。妊孕性低下が予想されるがん領域での小児、思春期・若年（以下、若年）がん患者に対し、がん治療開始前の妊孕性温存に関する情報提供は重要であるが、医療従事者間でさえ徹底されているとは言いがたいのが現状です。したがって、がん治療による性腺機能への影響について、がん治療前に患者等へ十分に説明されておらず、治療後に妊孕性低下に悩む患者がいることが心理社会的問題となっています。2017年3月、三重大学医学部附属病院（以下、当院）が中心となり、「三重がん・生殖医療ネットワーク」を発足しました。ネットワークの構築にあたり、三重県下の医療従事者への若年がん患者に対する妊孕性温存に関する情報提供が重要と考えましたが、医療従事者がどの程度の知識を持ち、患者へ情報提供を行っているか明らかではありませんでした。そこで、三重県下のがん診療に携わる病院の医療従事者を対象に、当院の生殖医療医より若年がん患者に対する妊孕性温存に関する講演を行い、講演前後にアンケー

ト調査を行いました。

講演前、がん患者を対象とした妊孕性温存療法に関する認知度は低く、がん治療前の患者への情報提供が十分ではない可能性が示唆されました。薬剤師は、がん患者や他の医療従事者から、がん生殖医療に関する幅広い知識を求められており、今後、情報提供をする機会が増えると予想され、相談者のニーズに応じた対応が必要であると考えられました。講演により医療従事者に妊孕性温存の意識が根付けば、患者は診断後早期に情報提供を受けられるようになり、妊孕性温存療法を受けるか否か十分に考える時間が得られ、QOL向上に寄与できると考えられました。妊孕性温存療法について啓蒙していくためには、高度生殖医療を提供するがん診療拠点病院でもある当院の役割は重要であると考えています。

このような栄誉ある賞を頂くことができたのは、ひとえに三重大学医学部病院産婦人科前沢忠志助教、薬剤部奥田真弘教授、岩本卓也准教授をはじめ薬剤部員の皆様のお力添えがあってこそだと深く感謝しております。また、本研究にご協力いただいた三重県下の病院関係者の方々に、この場をお借りし深謝いたします。今後も、三重・がん生殖医療ネットワークと、そして当院の発展に少しでも尽力したいと考えておりますのでご指導、ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

第12回国際川崎病会議でRichard D. Rowe Memorial Lecture賞を受賞して

医学部附属病院周産母子センター

三重大学先天性心疾患川崎病リサーチセンター 三 谷 義 英

2018年6月12-15日に横浜で開催されました第12回国際川崎病会議において、Richard D. Rowe Memorial Lecture賞を受賞させて頂きました。国際川崎病会議は、米国循環器学会（American Heart Association, AHA）がスポンサーをする川崎病研究者の国際会議で、3年に1回に米国と日本で交互に開催されます。第1回会議が1984年に開催され、今回で12回を数えます。今年は480名の世界の川崎病研究者が集い、4日間の熱い議論が交わされました。特筆すべきは、川崎病発見者の川崎富作先生が、93歳とご高齢ではありますが、英語でご挨拶された事で（図1）、研究に注がれる継続したバイタリテイに敬服致しました。本会議は、疫学、遺伝学、分子生物学、病理学、急性期臨床、成人期に及ぶ循環器学まで扱う集学的な会議で、最近3年間の川崎病研究の最先端を直に触れる貴重な機会です。それに加えて、情報交換の場では、貴重な交流の場でもあります。

記念講演のRichard D. Rowe先生（図2）は、1973-1985年にトロント小児病院の小児循環器

主任教授をされた先生で、前任のKeith教授、共同研究者のVlad教授との‘Keith, Rowe and Vlad’で知られる小児循環器学の初版のテキストの共著者として、小児循環器学の文字どおりパイオニアであり、川崎病の循環器学のパイオニアとしても広く知られます。偶然にも筆者の留学先がトロント小児病院小児循環器研究部門であり、当時の部長でカンファレンスと研修医講義で2年余りお世話になりましたFreedom主任教授は、1985年にRowe教授の後継者として教授になられた先生です。また、今回の講演で座長の労を賜りましたトロント小児病院小児循環器教授のMcCrindle先生（第11回会長）は、Freedom先生のお弟子さんで、筆者の留学当時からスタッフであり、20年来の川崎病研究の旧友の一人であります。

今回は、僭越ながら‘Toward Lifelong Cariology in Kawasaki Disease（川崎病の生涯循環器学に向かって）’と題して、最近20年間の三重大学での川崎病の冠後遺症研究をお話させて頂きました。

American Heart Association SCIENCE NEWS IKDS 2018



図1

Richard D. Rowe Memorial Lecture Presented by Yoshihide Mitani, M.D. Ph. D. Mie University Graduate School of Medicine



Richard D. Rowe, M.D. (1925-1982)

Richard D. Rowe Memorial Lecture

1988: Takao Atsuyoshi, M.D. Rose Vera, M.D.

1991: Anton E. Becker, M.D.

1999: Soichiro Kitamura, M.D.

2001: Tetsu Yamaguchi, M.D.

2005: Brian W. McCrindle, M.D.

2008: Masahiro Ishii, M.D.

2012: Shunichi Ogawa, M.D.

2015: Etsuko Tsuda, M.D.

2018: Yoshihide Mitani, M.D.

図2

僭越ながら過去の受賞者の末席に入れていただき、身が引き締まる思いであり、これまでの川崎病研究でご指導、御協力頂きました三重大学小児

科平山雅浩教授をはじめ、小児科、関連諸科の先生方に新たためて深謝申し上げます。

第6回国際肺高血圧会議で優秀演題賞を受賞して

医学部附属病院周産母子センター・三重大学先天性心疾患川崎病リサーチセンター 三谷 義 英
医学系研究科麻酔集中治療学 澤 田 博 文

この度、第6回国際川崎病会議で優秀演題賞を受賞させて頂きました。国際肺高血圧会議は、世界の肺高血圧研究者が一同に会し、基礎、疫学、臨床的な最新知見を議論する会議で、2018年2月27日-3月1日にニース（フランス）で開催されました（図1）。今回は、世界各地から1,376名の研究者が集い、活発な議論が交わされました。第1回会議は、食欲抑制剤による肺高血圧のパンデミックに関連して、1973年にジュネーブ（スイス）で開催され、やはり同様に食欲抑制剤による肺高血圧の流行がありました1998年に第2回がエビアン（フランス）で開催された以降、5年に1回開催されています。1998年の会は、筆者が肺高血圧の病態研究でトロント小児病院留学中であり、与えられた研究課題の1つが食欲抑制剤による肺高血圧形成機序の研究であり大変印象的でした。この20年間の血管医学領域における肺高血圧

研究の発展が、急速であったことを実感しています。本会の内容は追って、米国心臓病学会誌で発表され、世界各国の肺高血圧ガイドラインのもとになるエビデンス収集、専門家の意見の集約によるコンセンサスとして報告されます。加えて、本会の情報交換の場は、懇親の場でありかつ貴重な本音の情報交換の場でもあります。

今回の会では、一般演題174題が発表され、僭越ながら9題の優秀演題賞の一つに入れて頂きました。日本からは慢性血栓塞栓性肺高血圧のカテーテル治療に関する内科の2演題と筆者らの演題の計3題が含まれ、小児科領域では、他に基礎研究でシンシナチ小児病院から1演題あり、筆者らも含めて2演題でした。演題名は、'Early detection of pulmonary arterial hypertension in apparently healthy children by mandatory electrocardiography screening: A Japanese nationwide survey'で、僭越ながら筆者らが代表として日本小児循環器学会の全国調査を実施し、学校心電図検診が肺高血圧の早期診断に有用であることを報告しました。日本では1995年に全国規模で義務化された法制化後20年余りの歴史がありますが、学校心電図検診は海外にない日本独自のシステムであり、その早期診断における有用性を全国調査により証明しました。留学中に師事しましたRabinovich教授（現Stanford大）が、今回の基礎研究部門のTask forceの代表を勤められ、

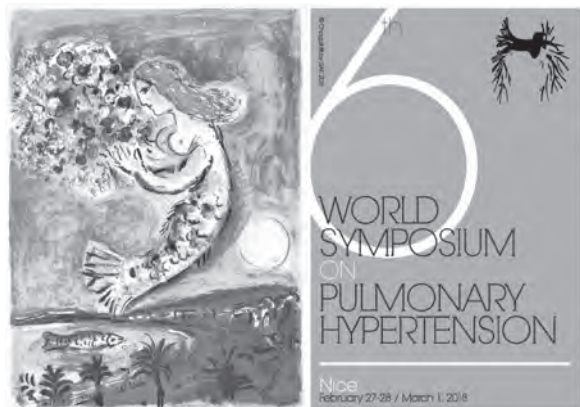


図1

我々の研究も大変ご評価頂いた事を嬉しく思います。また、表彰頂きました本会大会長のポローニア大学（イタリア）のGalie N教授は、招請講演でこの十数年間頻繁に来日され、常々ご挨拶させて頂き、意見交換等でお世話になっています（図2）。

最後になりますが、三重大学における肺高血圧研究グループで一貫してご指導頂きました麻酔集中治療学丸山一男教授を初め、多大なるご助言、御協力頂きました小児科平山雅浩教授、小児科・関連諸科の先生方にこの場をお借りして深謝致します。

ます。



図2

三重県薬剤師学術フォーラム2018の優秀演題賞を受賞して

薬剤部 垣内 唯衣奈

この度は、平成30年3月4日に開催されました三重県薬剤師学術フォーラム2018（三重県病院薬剤師会と三重県薬剤師会が合同で年に1回開催している学術大会）において優秀演題賞をいただきました。このような栄誉ある賞にご選考いただき、委員の先生方をはじめ、多くの方々に感謝致します。薬剤師1年目の私にとって初めての演題発表であり、要旨から研究結果のまとめ方、スライドの作成方法等、多々苦渋し悩むこともありました。発表に関しましてご指導くださいました先生方のおかげでこのような賞をいただくことができたと考えております。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。以下簡単ではありますが、受賞した内容について述べたいと思います。

私は、「三重大学医学部附属病院における未熟児貧血に対する鉄剤とエリスロポエチン製剤の使用実態調査」という演題で発表いたしました。私が当院新生児病棟の薬剤管理指導業務へ携わり始めた年に「新生児に対する鉄剤投与のガイドライン2017年」が策定され、そして、早産児によくみ

られる鉄欠乏を特徴とする未熟児貧血では、発達段階の脳に及ぼす影響が大きいため、適切な薬物治療が重要であると言われていることを学びました。以前、2003年に刊行された「早産児に対する経口鉄剤投与のガイドライン」の目的は早産児がNICUを退院するまでに、正期産児の鉄貯蔵状態に近づくことでしたが、策定後の目的は、早産・低出生体重児の重要貧血予防と成長・神経伝達の向上へと変更され、未熟児貧血に対する適切な鉄剤投与の重要性を感じました。当院新生児病棟でも、鉄剤およびエリスロポエチン製剤が処方される患児が多くみられますが、投与量は医師の裁量に依るところが大きいのが現状です。そこで、ガイドラインの改訂が現状に反映されているのか、また、推奨される鉄剤投与量が添付文書・小児薬用量・ガイドラインにおいて異なっていることから、未熟児貧血に対する薬物療法の実態調査と、医師の未熟児貧血治療に対する意識調査が必要と考えました。

処方解析の結果から、合併症の有無に関わらず、

エリスロポエチン製剤併用時の鉄剤投与量は、非併用時に比べ増量される傾向が認められました。この結果は、医師が鉄剤の投与量に関してエリスロポエチン製剤併用の有無を重要視している意識結果と一致していました。しかし、ガイドラインでは既に鉄剤が補充中であればエリスロポエチン製剤併用時に鉄剤を増量することを推奨していませんが、エリスロポエチン製剤併用開始による鉄剤の推奨投与量は明言できないとされています。これらの結果から、今後、薬剤師からエリスロポエチン製剤投与の有無や個々の状態に応じた鉄剤の

投与量を提案するために、鉄剤投与量と治療効果との関係を評価する必要があると考えられます。

今回の発表を通して、処方箋上だけでは推測することしかできない医師の考えを実際に調査することや、投与決定に寄与する因子を把握することの重要性を感じました。医師の考えと患者の状態を充分把握した上で、薬物投与量が適切であるかを判断できる責任ある薬剤師への第一歩となったように思います。これからもより良い薬物治療のために他職種との連携をはかり日々精進してまいります。

学位記授与式

平成30年7月18日（水）、事務局2階会議室で学位記授与式が挙行され、駒田学長から5名の方々に三重大学博士（医学）の称号が授与されました。

平成30年9月19日（水）、三翠会館1階多目的ホールで学位記授与式が挙行され、駒田学長から3名の方々に三重大学修士（医学）、8名の方々に三重大学博士（医学）の称号が授与されました。



三重大学医学部の理念

Mission and Core Principles of Mie University Faculty of Medicine

確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな創造力と研究能力を養い、人類の健康と福祉の向上につとめ、地域および国際社会に貢献する。

Mie University, School of Medicine aims to raise medical personnel with a steadfast sense of mission and ethical view, and to cultivate in it students and faculties both rich creativity and research capacity.

The school will strive for development of human health and welfare and contribute to regional and international society.

編集後記

朝夕はめっきり涼しくなり、日増しに秋の深まりを感じる季節となりました。さて、182号となる本号も、三重大学医学部の活躍が感じられる報告が多数寄せられ、充実した編集内容となっております。

医師国家試験、看護師国家試験の結果報告に始まり、「医学教育分野別認証評価の受審に向けての取り組み」、また、ご異動される平工雄介先生、ご退任される西川政勝先生には、これまでのご活躍や今後についての思いを記事にさせていただきました。

トピックスでは、第30回日本医学会総会2019中部のプレイベントとして開催された「市民公開健康講座」、「専門医制度について」、「第70回西日本医学生総合体育大会 総合優勝」、「研究室研修学生委員活動記録」、「リウマチ・膠原病センター開設1周年記念市民公開講座」、医学科および看護学科「オープンキャンパス」開催報告、看護学科学生の「学業優秀学生学長賞授与」「医学部長表彰授与」について掲載しております。

また学会だよりでは、各部門で主催した学会、研修会、教育セミナー、フォーラム、シンポジウムの開催報告に加え、学会賞、Best Poster award、奨励賞、優秀演題賞といった、名誉ある国内外での受賞報告が記載されており、そのご活躍ぶりがうかがわれます。教職員・学生の様々な取り組みが着実に重ねられていくことは、今後、三重大学が国際的評価を受けるうえでも重要であると思います。是非お読みいただきたいと思います。

最後に、本号に御寄稿いただいた方々に心より感謝申し上げます。

編集委員 福録恵子

編集委員

吉田 利通 楠 正人 丸山 一男
西村 有平 内田 恵一 福録 恵子
山崎 晴夫

編集発行

三重大学 医学部ニュース編集委員会
〒514-8507 津市江戸橋2-174
国立大学法人 三重大学医学・病院管理部
TEL. 059 (232) 1111 (代表) FAX. 059 (232) 7498
E-mail : s-soumu@mo.medic.mie-u.ac.jp